２０１９年１２月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

１２月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、１８日(水)、札幌グランドホテルにおいて、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、北海道クローズアップ「温暖化で変わるワイン・ビジネス～北海道にチャンスはあるか～」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、２０２０年１月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	山下　徹也	((株)グローバル経営センター　代表取締役専務)
副委員長	蛭田亜紗子	(小説家)
委　　員	今村　江穂	(NPO 法人子どもと文化のひろば ぷれいおん・とかち　理事長)
	嘉指　博行	(北海道新聞社論説委員)
	桐生　宇優	(北雄ラッキー株式会社　代表取締役社長)
	齋藤　拓也	(北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　准教授)
	佐々木良榮	(デザイナー、(有) 良栄・ＰＬＡＮ　代表取締役)
	成田　正夫	(ながぬま農業協同組合　代表理事組合長)
	船山　大介	(特定非営利活動法人　Ｎｏ Ｌｉｍｉｔｓ　理事長)
	村田　博	((株)村田商店　代表取締役)

（主な発言）

＜北海道クローズアップ「温暖化で変わるワイン・ビジネス
～北海道にチャンスはあるか～」
(総合　１２月１３日(金)後 7:30～7：55 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)について＞

○　ワインの原料となるブドウの生産に温暖化が影響を及ぼしているという現状が大変よく分かった。300 年以上に及ぶワイン作りの伝統が気温の上昇で困難になる中、中国はそこを見逃さず政府を挙げて輸出に励むなど、温暖化が社会や産業に及ぼす危機を、逆にビジネスチャンスと捉えている人たちがいることにも驚いた。また、ワインジャーナリストの山本昭彦さんの解説はとても分かりやすく、ボルドーやブルゴーニュといった有名な生産地が、世界中にその代替地を求めていることが理解できた。

ただ、根底にあるのが地球環境の問題なので、番組の締め方が若干浅いという印象を受け残念に思った。今回取り上げた函館に限らず、富良野ワインや池田ワインなど北海道でも挑戦している所はたくさんある。それらの地域と函館ワインはどこがどう違うのか、その点がいまひとつ分からず散漫になったという気がした。

○　ワイン文化を育んできたブルゴーニュのブドウの葉が枯れて実が焼けている映像を実際に見て、地球温暖化の怖さがリアルに伝わってきた。しかし、ブドウ栽培をだめにしてしまう温暖化の切実な問題提起が、ワイン・ビジネスの世界の話だけになってしまっていて、もったいない気がした。有力なワイナリーが北海道の気候や風土、土壌に注目してくれているのはとてもうれしいが、ロンドンのパーティーでは、北海道ワインの評価は低く、歴史や伝統に裏打ちされたヨーロッパに追いつくのはなかなか難しいということを感じた。最初はとてもドラマチックだと思ったが、最後は普通のところに落ち着いてしまった印象だ。また、今後１０年間で道内には平均気温が３度以上も上がると予測されている所があり、それに伴う大豆や小豆、ジャガイモなどの農作物への影響についても伝えており、興味深かった。これからの農業がとても大変なことになるということを考えると、ワインの話よりも北海道を支える農産物について深掘りしたほうが、地球温暖化が及ぼす悪影響の切実さがもっと伝わったのではないか。

○　とても興味深く見たが、番組の時間が短く、もの足りない内容だった。地球温暖化でワインの品質が劣化しているという話は聞いていたが、実際に現地の映像を見るのは大変興味深かった。北海道ワインに対しての海外の品評は大変厳しい言葉が集まっていたが、これから伸びていく可能性はあり、正直に現状を知らせるという意味では、とても価値のある内容だったと思う。また、ワインツーリズムに取り組んでいる農家はあっても、その言葉を知らない人も多い。ワインツーリズムの北海道における新たな可能性についてもっと詳しく伝え、ワインツーリズムで観光立国を目指していくのだ、という流れになれば夢があっていいエンディングだったのではないか。

○　地球温暖化の影響がブドウの栽培とワイン作りにまで及び、2050 年にはワインの生産に適さなくなると考えられている場所に、ヨーロッパのワインの名産地も数多く含まれているという、衝撃的な出だしに引き込まれた。しかし、北海道ワインが何を目指してロンドンのパーティーに出品されたのか分からず、もう少し工夫が必要ではないかと感じた。スタジオではワイン作りの理想についていろいろな論点からワインジャーナリストが説明していたが、北海道の生産者の紹介がほとんどなく、もの足りなく感じるところもあった。ブドウの品種などについて掘り下げて解説するのはいいが、北海道との関わりや道内のワイン生産者の成功や失敗、地球温暖化にこれからど

のように対応していこうとしているのか、といったことを番組ではやってほしかった。最後に女性アナウンサーが「これから北海道はワインツーリズムを目指そうとしている」と言っていたが、番組の中で北海道のワインツーリズムの話がほとんど出てこなかったので、まとめとしては物足りなかった。

○　温暖化によって、ワインの世界がどう変わるのか、フランスの有名ワイナリーが函館に来ることでどのように発展するのかと興味深く見た。まず、ブルゴーニュのワイナリーの考え方は、温暖化で自分のブドウを作れなくなったから新天地を目指すという考えだったと思うが、それによって残った地元の経済などはどうなるのかが見えなかった。一方で、ボルドーのワイナリーは今まで使っていた品種と違うものを使ってワインの質を下げないようにという取り組みだったが、それぞれのワイナリーの考え方をもっと知りたかった。ワイン事業に参入してきた中国政府はブドウ畑を開発するときに木を伐採したと思うが、自然環境に対しての考え方はどうなのかと感じた。番組全体として温暖化を中心にするのか、それともワイン・ビジネスを中心にして放送するのか、そこのバランスが取れていないという気がした。

○　地球温暖化という非常に大きなテーマが、ワインあるいは北海道ということで非常に身近な問題として考えるいい機会になった。実際にブドウが実っても、５年、１０年かからないとワインができないということで、長期的に考えていく必要があるということがよく分かった。地球温暖化については、北海道として新たなビジネスチャンスが生まれる可能性があるということとともに、温暖化にどう対応するのかという視点も必要だ。しかし、温暖化そのものをどうするのかという視点があまりなく、最後のまとめが弱かったせいもあって、複雑な思いを抱いた。地球温暖化をより身近に考えてもらうためにも、例えばイカの不漁やそれに伴う加工業者の経営圧迫など、そういう負の側面をとらえた番組作りにも期待したい。

○　温暖化の影響をワイン作りを通して見る、という視点が興味深く面白かった。実際にブルゴーニュでワイン生産に使われるブドウ品種のピノ・ノワールやメルローなどの生産が困難になっているという現状を見て、温暖化の影響による変化を実感した。また、ワインの生産や市場が変化するということだけではなく、激動するビジネスとしてとても分かりやすかった。そして、中国で作られたワインがすでに海外で受け入れられていることに、中国の脅威と勢いを感じた。ワイン・ビジネスを通して、温暖化が何をもたらすのかを示唆していたが、北海道の農業の行く末にもつながっていて、深く考えさせられる内容だった。ただ、ワインツーリズムを知らない人もたくさんいるので、最後の締め方が少しぼやけたように思う。番組で取り上げる内容はいつもすばらしいのだが、時間が短く制作側の意図していることを伝え切れていないように感

じる。

○　冒頭で 2030 年代に全道平均で気温が１．６度上昇すると、農作物の収穫量や品質がどう変化するのかがフリップで具体的に示されていて、興味が沸いた。ロンドンのパーティーではいろいろな評価があったが、北海道がチャレンジャーとして世界に目を向けながら品質向上を目指して、行政、生産者と関係者が意気込みを持ってワイン・ビジネスに取り組んでいることが伝わってきた。温暖化を視野に入れて、北海道独自のワインツーリズムがどのように発展していくのかを模索する番組なのかと期待していたが、実際はそれについての深掘りがなくもの足りないという印象を受けた。ワインジャーナリストの山本さんがフランスのワイン生産地の自然環境との調和や栽培農家についてコメントをしていたが、視聴者はまさにその具体例を知りたいのではないか。そして、北海道ワインとして実績のある小樽市、富良野市、池田町などのワイン作りは、今後温暖化でどうなるのか、というところも気になった。

○　浅野里香アナウンサーのナレーションがとても心地よく、番組に引き込まれた。冒頭で１０年後の北海道での米や大豆、小豆などの収穫量や味の変化について話があり、特にジャガイモや牧草は深刻な状態に陥っていくことが紹介されていた。今回のテーマはワイン・ビジネスだが、温暖化による米など農産物への影響や、全国各地でどういった対策がとられているのか、そちらのほうをもっと見たいと思った。温暖化がタイトルに入っているにも関わらず、ビジネスに寄り過ぎている内容に、見ていてかなり疑問を感じた。最後にスタジオで環境破壊についての話題もあったが、取って付けたような感じを受けた。ワインジャーナリストの方の話も、あくまでブルゴーニュという歴史と知名度のある、すでに有名な産地だからできる限定的なやり方で、あまり参考にならないと思った。北海道のワインに詳しい人の話ももう少し聞けたらよかった。

○　温暖化によって北海道で少しずつ育まれてきたワイン・ビジネスの飛躍を紹介する番組だと思って見た。番組冒頭の温暖化が北海道の既存の農産物に大きく影響を与えることを示した一覧表は衝撃的だった。道内で数多くのワイナリーが展開している中、ワイン・ビジネスがこれから北海道の基幹産業の軸になるかもしれないという点にとても好感を持った。

（ＮＨＫ側）

温暖化という一見難しく硬いテーマも、身近なワインを切り口にすることで関心をもってもらえるのではと考え企画した。国際会議のＣＯＰ２５が開催されていたタイミングでもあり、

また温暖化は北海道にとっても近い将来極めて大きな影響を与えるということを認識してもらおうと、今回はワインをテーマに見てもらおうと思った。番組でも一部紹介したが、温暖化によって北海道の農作物が今後受ける影響についても引き続き取材していく。アグリビジネス、アグリツーリズムについても引き続きテーマとして考えていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　１１月２９日(金)の北海道クローズアップ「病院がなくなる！？～どうなる地域医療～」を見た。地方やへき地に医師が来ないという話は常にあるが、医療を受ける側が変わる工夫をすれば、違う世界が見えることを知った。そういうことを道内の実例で紹介しているのはとても興味深く、いろいろな地方の参考になったのではないか。病院から診療所に変えた沼田町の例や赤平市の住民の無償ボランティアから、何を優先するかを自らも考えていかなければいけない時代になったのだと見ていて思った。こうした医療を受ける側の変化は、医師など医療を提供する側にとっても、とても働きがいのある地域になるのではないかという希望を持つことができた。

○　地域によって病院を巡って抱えている事情も違い、それぞれの困難があるということが丁寧に紹介されていた。沼田町と赤平市というそれぞれに困難な地域で、単に病院を縮小するというだけではない具体的な事例が示されていて、これから北海道の多くの町でも取り組まなければならない問題なので、その参考になるとてもいい番組だった。また、何度も意見交換をし、住民と行政の間でお互いが納得して協力するという関係の大切さがよく分かった。

○　医療費がこれからも増加していくという現状が非常に分かりやすく、勉強になる番組だった。しかし、国の考え方として厚生労働省医政局地域医療計画課課長のコメントが、非常に抽象的で国がどうしたいのかが分からなかった。地域医療をどのような形で残すかという課題提起の中、沼田町の住民と行政が何度も話し合いをした結果、地域医療に特化した取り組みを見つけており、非常に参考になった。赤平市の住民の方々も自分たちで考え、力になれることを導き出した。われわれ自身が主体的に病院を残せるような地域医療を考えていかなければならないと感じた。ただ、沼田町や赤平市への財政的な支援について国がどのように関わっていたのかが分からず、そのことが番組で紹介されればもっとよかった。

○　病院の再編や統合の理由として挙げられていた医療給付費が年々膨らんでいるこ

とと、医師の労働環境の問題についてもっと詳しく説明してほしかった。沼田町の例は住民説明会の理解を得て、自治体が住民とまっすぐ向き合っているとても興味深いものであり、赤平町の無償ボランティアが自分たちの病院を守るために支えているという例も、財政難の自治体でのやり方としてとても現実的な話だった。ただ、各自治体の取り組みはとても興味深かったが、スタジオゲストの病院規模の縮小や通院時間が長くなるという話は、北海道の広さを考慮しておらず、引っかかった。もっと北海道の実情を分かっている方に話してほしかった。

○　北海道が抱える重要な問題である医療問題、人口減少やコミュニティーの喪失を如実に表した番組だと思った。都道府県で一番大きな面積を誇る北海道だが、その面積の大きさが逆にデメリットであるということを的確に冷静に表現できていた。ユニバーサルサービスとしての医療には自治体単独ではおのずと限界が見えてくる。地方のさまざまな取り組みを紹介しており、地域独自の取り組みを行っている自治体に温かく寄り添った目線で伝えており、とても評価できる。問題を提起する番組として、「北海道クローズアップ」の存在を大いにアピールできていた番組だった。

○　１２月７日(土)の知っとく北海道「今日はとことん！後志エリア～寿都町ＶＳ仁木町～」(総合 前 10:25～11:15 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。俳優の岩尾亮さんとタレントの藤岡みなみさんの安定したゴールデンコンビで楽しく見られた。タレントの塚本奈緒美さんのナレーションも、バラエティーらしく元気があってよかった。しかし、番組進行と同時に視聴者からのＳＮＳ投稿が表示されてくるが、その中の文字の間違いが気になり集中して見ることができなかった。投稿されたものをそのまま流しているのかどうか気になった。

○　岩尾さんも藤岡さんもそれぞれの魅力が出ており、ゲストで俳優の福地桃子さんはとてもフレッシュで、番組に頑張ってなじもうとしている姿が好印象だった。岩尾キャスターが宿で偶然見た寿都町の謎のローカル番組を追うという展開は、地元の電気屋さんが昭和５０年にケーブルテレビでの放送を北海道で初めて行ったという歴史もわかり、地域密着型で面白かった。

○　ゲストの福地さんがとてもすてきな笑顔で話されており、いい起用だと感じた。ホッケの卵の塩漬けというのは初めて知って、ぜひ食べてみたいと思った。

（ＮＨＫ側）

番組の中で紹介しているＳＮＳの投稿は、職員がどれを出すかリアルタイムで判断して、投稿をそのまま表示している。Ｓ

ＮＳなので必ずしもきちんとした文章ではないかもしれないが、番組を見ながらつぶやいている視聴者の参加感を大事にしている。

○　１２月１４日(土)の北海道ＬＯＶＥテレビ　ダークサイドミステリー「北海道三毛別　ヒグマ襲撃事件の謎に迫る」(総合　前10:24～11:24北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。北海道で起こった歴史的に悲惨な事件だが、おどろおどろしいミステリー仕立ての劇画タッチの描き方で番組にすると、観光客の足にも影響があるのではないかと思った。解説の動物学者が「熊と出くわしたら、逃げてはいけない。話しかけなさい」と言っていたが、現実的な回避方法ではないと思った。

○　ヒグマの習性や特性がよく紹介されており非常にリアルで、歴史的事件として見るにはためになる番組だった。熊と遭遇した時は背中を向けて逃げないのが基本であるなど、熊の対処法がよく分かった。

○　１１月３０日(土)のＮＨＫスペシャル「ボクの自学ノート～７年間の小さな大冒険～」を見た。自分でテーマを見つけて学ぶ、好きなことをして学び続けているという記録が、とても興味深かった。自学ノートの取り組みから、問いに対する自分なりの答えを見つける力、探求心といったものが強く伝わってきて、学校だけが学びの場ではないのだということがよく分かった。その一方で、今の教育現場の課題も浮き彫りになって、日本の学校教育の在り方を考えさせられる、とても重いテーマだと感じた。今後も、現在の学校に収まり切らない子供たちの現状や、新しい教育観を持って実践している教育現場の話題などに期待したい。

○　１２月３日(火)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」で旭山動物園など日本の動物園に関するリポートを見た。動物園での「動物の福祉」はとても興味深かった。動物の生態をうまく活用する先駆的な動物園だと思っていた旭山動物園ですら、ヒグマ舎が刑務所みたいだと海外から批判されていることに驚いた。ヨーロッパのように野生の形に近いほうがよいとは思うが、入場料や寄付が多くないと取り組むことは難しいということだった。そんな中でも、動物のそばを歩けるなどの日本独自の取り組みも紹介されていて、とてもよかった。特に、山梨県甲府市の遊亀公園付属動物園では高齢で視力がほぼないライオンを飼育していて、欧米のように苦しまないようにと安楽死させることはせず、老いても一生懸命生きる姿を見てもらおうとしている。そうした「動物の福祉」に関する日本らしい考え方は、とても興味深いものだった。

○　１２月１日(日)から１２月８日(日)のＮＨＫスペシャル　「シリーズ　体感　首都

直下地震」を見た。架空の首都であるパラレル東京が、震災でどのような被害が起こりうるのかを時系列に沿って映像で示していて、ひと事とは思えずかなりショックを受けた。何が起こりえるかということを映像で分かりやすく示していたことは非常によく、ドラマパートのあとにコメントする出演者の気持ちに共感できるところもあった。スタジオには専門家の方もいて、現実に災害が起きた場合、どのように向き合って取り組めばいいかという話や、群衆雪崩や堤防が決壊するなど事前に予想ができないような事象についても紹介しており、非常に勉強になった。タイムラインに沿う形で、１週間にわたって番組を放送するという試みは、インパクトがあってよかった。

○　番組の時間がとても長く、ずっと見ていられない感じだった。見ていると辛くなる映像がリアルに再現されていた。具体的にある地域では一つの街がなくなるなどシミュレーションされており、実際に今その土地に住んでいる人はどう思うのか心配になったりもしたが、非常に大切なことを取り上げており、これはＮＨＫでなければできない内容だと思った。

○　１２月６日(金)のＮＨＫキャンペーン「災害列島　生きるスキル　巨大地震　あなたの町の“地域リスク”」(総合 後 7:30～8:42)を見た。ＣＧを含めてかなりおどろおどろしい映像が流れており、周囲からも「あれを見たら、本当に怖くなる」といった話があった。そういう声が聞こえるということは、とても精巧だったのではないのか。災害の記憶は忘れ去られてしまうが、そういった場合にこのような怖いと思わせるような映像を流すのは、実際の防災の役に立っていると思う。

○　１２月７日(土)のＥＴＶ特集・選　追悼　中村哲さん「武器ではなく　命の水を」を見た。医者として命を守るということを最優先に考えた結果、用水路を造るということに全力を注ぎ、平和の実現のために信念を持って、前進し続けた人だということが、番組の過去の映像を通して、説得力を持って伝えられていた。また、「ニュースウオッチ９」などのニュース番組でも生前の様子が紹介されており、中村さんの数々の言葉は、自分自身の胸にも刻んでいきたいと思わせられた。

○　１２月１０日(火)のクローズアップ現代＋「中村哲医師　貫いた志」を見た。タイムリーなテーマを素早く番組化することがいつもすばらしい。争いの根本である貧困を解消するという話や、アフガンの問題は政治や軍事の問題ではなく、パンと水の問題だということを言っており、非常に感動した。「緑の大地計画」で７年かけて造ったという長い水路を造るのに、どこからどのようなお金が出ていたのか、資金面の流れについても知りたかった。現地の人の声や、かつて一緒に活動した人が話すエピソードから、中村さんの人柄がよく伝わってきた。このような日本人がいて、これだ

けの偉業を成したのだということから、我々が学ぶものはたくさんある。尊い命が失われたということを、心から残念に感じた。

○　ＮＨＫ　ＮＥＷＳ　ＷＥＢにあがっているＮｅｗｓ　Ｕｐ「魅力度１位の函館から人が消える？！」を読んだ。確かに、魅力度ナンバー１なのに幸福度はワースト３で人口も減っている。ただ、函館への転入もあるのに函館からの転出のデータのみを挙げて、「函館から人が消える」とか「さらば函館」というのはちょっとやり過ぎなのではないか、というイメージを持った。医療費助成について横並びにしない自治体にとても疑問を感じているので、その指摘も含めて転出データだけという、一方向の事象を挙げるだけではなく、実際に住んでいない人と住んでいる人の意識の差はどこにあるのか、また逆に、子育て世代が医療費の助成制度がある北斗市や七飯町からなぜ函館市に転入して来たのかという背景も知りたかった。

ＮＨＫ札幌拠点放送局
番組審議会事務局

２０１９年１１月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

１１月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、２０日(水)、ＮＨＫ札幌拠点放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、北海道クローズアップ「白馬の遺言～本屋のオヤジ　久住邦晴伝～」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、１２月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	山下　徹也	((株)グローバル経営センター　代表取締役専務)
副委員長	蛭田亜紗子	(小説家)
委　　員	今村　江穂	(NPO 法人子どもと文化のひろば ぷれいおん・とかち　理事長)
	嘉指　博行	(北海道新聞社論説委員)
	倉本ひと恵	(オホーツクベーグル　代表)
	齋藤　拓也	(北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　准教授)
	成田　正夫	(ながぬま農業協同組合　代表理事組合長)
	船山　大介	(特定非営利活動法人　Ｎｏ Ｌｉｍｉｔｓ　理事長)
	村田　博	((株)村田商店　代表取締役)

（主な発言）

＜北海道クローズアップ「白馬の遺言～本屋のオヤジ　久住邦晴伝～」
(総合　１１月８日(金)後 7:30～7：55 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)について＞

○　店主の久住邦晴さんが行った「売れない文庫フェア」のきっかけが、本はよいものだから読んでみてほしいという思いだったという長女の絵里香さんの回想や、手書きのポップのうそ偽りのないストレートな熱意あふれる言葉から、久住さんの本への深い愛情が伝わってきた。本離れや活字離れが深刻となる一方で、「中学生はこれを読め」という取り組みは、本離れの中学生に関わらず、大人にも訴えかける熱量を感じた。また、出版社ミシマ社の代表であり、編集者でもある三島邦弘さんが一冊入魂という本作りへの思いを、書店員の久住さんと共有できていたということが印象的だった。そして、自伝出版に書店の再起を懸けようとしたところにも、本への愛情が尽きないということが表れていて見応えがあった。娘さんの「父は本になった」という言

葉は「スーホの白い馬」のストーリーと重なって非常に感動的だった。北海道のように小規模な街が広範囲にある土地で、小規模な本屋さんがどうしたら生き残っていけるのか、改めて考えてみたくなった。

○　本屋が衰退していく中、子どもたちに本を読ませるための努力もよく伝わってきたし、同業者への発言の影響力やいろいろなアイデアを持った久住さんの本に対する情熱が全面に出ていた。結局閉店に追い込まれてしまったが、もう一度本屋を開きたいという自分の思いを残していて、娘の絵里香さんの言葉からも本当に本に対する情熱を持った人だと思った。１万部という自伝の販売部数はまさに久住さんの魂であり、絵里香さんも「分骨されているみたい」と言っていた。久住さんの思い、伝えたいことがその本に込められているということも分かった。しかし、番組冒頭で久住さんの講演をきっかけに、週に１度自宅で本屋を開いている高齢のご夫婦が紹介されていたが、どのような経緯で開くことになったのかが分かるとなおよかったのではないかと思う。

○　個人経営の書店が苦戦を強いられている中で、お客さんを明確に想定し、自分の言葉や思いを届けようとする企画を次々と打ち出し、店が置かれている苦境からどうにかして抜け出そうとするその姿にとても感銘を受けた。本を売ることだけではなく、読む人たちに本のすばらしさを伝えたいという深い思いと、本を作る側が込めた思いを受け止めてそれを支えたいという志が、当時の中学生の反応や、交流していた出版社の人たちの言葉から伝わってきた。「白馬の遺言」という謎かけのようなタイトルが最初はよく分からなかったが、最後に全体の流れから謎が解けるような作りになっており、一貫したメッセージを伝えようとしていてとてもよかった。久住さんの思いを伝える自伝が１万部以上売れるというのは、やはりすごいことであり、番組の最後に娘さんが「分骨されているみたい」と言っているのも、久住さんのメッセージに重なるところがあった。久住さんの思いをすくい上げながらうまく番組が作られていると感じた。

○　冒頭で週１回しか開いていない浦河町の書店が出ており、とても興味が沸いた。だが、その後の久住さんの話になるとその書店の話が置き去りにされてしまった。講演会をきっかけに、田舎でも経営していく方法を編み出したということだろうが、番組ではそこまで踏み込むことはなく残念だった。また、いきなり葬式の朗読会という言葉が出てきて驚いた。番組を見続けると、久住さんは書店で朗読会をしており、本人のお葬式でも朗読会をという遺言を残されていたとわかったが、最初の葬式の朗読会のシーンの前にもそうした流れの説明があれば、つながりやすかったのではないか。久住さんが経営に行き詰まりながらも奮闘する姿や、起死回生を狙いいろいろな手を

打つ場面には、とても心を打たれた。また、久住さんの書かれた自伝が「スーホの白い馬」の物語のように、自分の形を残すというところにうまくつながっていたと思う。札幌にもこのような書店があって、それを綿々と取材してきたということもよく分かった。

（ＮＨＫ側）

浦河町の書店は、久住さんから思い切った経営の在り方を提案されて、それを参考にして店を開いたということだった。しかし、その経営の部分は短時間で伝えることが難しかったため、割愛した。久住さんの展開してきたアイデアは、紹介した以外にも多くある。その中に毎日のように朗読会をやるというものがあったが、その朗読会の紹介があまりできなかったため、葬式での朗読会の部分とのつながりが弱くなってしまったかもしれない。

○　街の本屋さんを取り上げた番組で、本は人生を豊かにするということを再認識するとともに、中小企業を取り巻く環境は本当に大きく変わったということを、この番組を通じて改めて実感した。久住さんが活字離れやコンビニの普及、インターネットなどの時代の波にほんろうされた様子がよく分かるように描かれており、書店というビジネスモデルのもろさが非常によく分かった。この番組は衰退していく地方都市に対してもメッセージを送っており、地域における中小企業の役割や存在意義なども考えさせられた。そして、利便性と引き替えに失ったものは意外と大きいのだと感じた。

○　最初は「白馬の遺言」いうタイトルと本屋がどうつながっていくのかが分からなかったが、最後にきちんとまとめられ、とてもよくできていた。たくさんの努力とアイデアを持ちながらも生き残ることができないという事実に、しょう然とした。死して何かを残すという「スーホの白い馬」の物語に、久住さんの思いが重なった。また、久住さんとの出会いが事業の支えともなった出版社がどういう本を出して、どういう経営になっていたのかが分からなかったので、もう少し掘り下げてほしかった。代表の三島さんの「本は書き手や作り手を始め、関わった人たちみんなの熱量が１冊にパッケージされたもの」という言葉はとてもよい。しかし、今の若い人たちはＳＮＳで発信をし、情報を得ている。残念ながら昔のように本に戻ってくる時代ではないが、久住さんの「活字は決してなくならない」という思いを大事にしていきたい。

○　冒頭で紹介された浦河町の書店が久住さんから講演でどのようなことを具体的に教わったのか。また、本屋の商談会でいろいろな方々が久住さんについて話していた

が、具体的なイメージがしにくく、出版社の代表もどのようなメッセージを受け取っていたのかという、久住さんの具体的な主張がなかったのが残念な気がした。褒め言葉は出てくるが、何をしたからなのか、何とアドバイスをしたのかがなく置いてきぼりにされた感じがある。なぜ今この人を取り上げたかというのが分からなった。一方で、自伝が１万部も売れているのはすごいことなので、もっと本の中身を教えてもらいたかった。しかし、ＮＨＫ札幌局のホームページにこの番組の取材記があり、政治学者の中島岳志さんのインタビューを見て、番組の見え方が変わった。中島さんの話はとても共感でき、久住さんという人物像が具体的に浮かんできたような気がした。中島さんのインタビューは本編に入れておくべきだったのではないか。

（ＮＨＫ側）

久住さんの主張や言葉を探し、撮影期間の終盤に中島さんのインタビューを撮り足したが、久住さんと中島さんの関係性などの説明にも多くの時間が必要になるため、ホームページでの紹介とした。出版社がどういう本を出しているかについては、一概にまとめて伝えるのが困難だった。

○　「白馬の遺言」というタイトルが気になりつつ見始めた。浦河町の老夫婦が営んでいる本屋さんから始まって意表をつくよい導入だった。久住さんは本に対して子供のように真っ直ぐな愛情を持っていた人だと、非常に感銘を受けた。自分がよいと思った本を共有したい、読んでもらいたいというとてもシンプルな熱意に、心が洗われる気持ちになった。自伝を書いた理由も、全国を講演して、それを資金にまた店をやりたいという計画があったと娘さんが話しており、ただの本好きな書店のおじさんではない面も見えて興味深かった。「スーホの白い馬」の結末と重なる、１万部販売された久住さんの自伝を指しての「父は本になった。分骨されているみたい」という絵里香さんの言葉はとても余韻の残る終わり方でよかった。

○　なぜ今このタイミングでの放送になったのか、また、この番組の制作側の本当に伝えたいテーマは一体何だったのか疑問だった。ＳＮＳなどで安易に発信できる現代にあらがい続ける久住さんの姿に、温かく寄り添いながら制作されていると思ったが、ハッピーエンドではない、１人の人生の哀愁を漂わせるような形のこの番組は何を求めているのか。久住さんの人生や、本・文章の大事さを真摯（しんし）に伝えるのは番組的にはとてもすばらしいとは思うが、テーマがぼやけた感じがした。ＮＨＫとしてこの番組を作った意図は何だったのか、何を伝えたかったのか教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

まず本や本屋はＳＮＳやインターネットとどこが違うのか、長所は何かということを考えた。本や本屋が衰退してしまったときに、その存在の何が大事だったのかをきちんと踏まえて次に進んだほうがいいのではないかと議論した。冒頭で少女がうれしそうに本を買いに来た映像を残したが、本屋だけにあるよさという部分を久住さんが大事にしていたことと解釈し、そういったシーンを選んで構成した。利便性がよくなっていくことでわれわれは何を失うのか、そういうことを検討することも大事ではないかと思い、読書週間であることもあり、本に関する番組を制作しようと考えた。

＜放送番組一般について＞

○　１０月２５日(金)の北海道クローズアップ「アイヌの美　わたしの表現～阿寒　工芸作家の挑戦～」を見た。アイヌの伝統的な楽器であるムックリの音で始まったが、以前放送していたアイヌの番組もムックリから始まっていた。アイヌの物語だと分かるが、同じような印象を受ける。番組で紹介されている工芸作家の郷右近富貴子さんは、アイヌのウポポを唄うアーティストもされている方なので、ムックリとは違う始まり方もあったのではないか。そして、アイヌの工芸品に有名なセレクトショップが接触していたが、どういうルートでそうなったのか。観光協会も関係しているようだがその流れがよく分からなかった。最後の熊彫り師と自称した藤戸竹喜さんという、熊の毛の一本一本までを流れるように掘る熊彫り作家を、番組を通して知ることができてよかった。

○　１１月１日(金)の北海道クローズアップ「リーチ　マイケル～“多国籍ジャパン”への道～」を見た。日本中を熱狂させたラグビー日本代表の中心的選手であるリーチ選手と、北海道とのつながりに関心を持って見た。チームの半数が外国出身という中で、なぜ心を一つに戦うことができたのかを探りつつ、日本代表ラグビーチームが教えてくれたこととして、スポーツだけにとどまらない、多様性社会のヒントを提示するような内容だった。北海道とリーチ選手、あるいはリーチ選手のルーツにフォーカスした内容を期待していたので、意外性と同時に少し物足りない感じもした。しかし、リーチ選手の足跡を通じて、トップダウンではなく自ら考えることや個の人間として見ることの大切さなど、一スポーツを超えたこれからの日本の社会に必要な視点に気づかされた。ラグビーの魅力を再確認できる番組だった。

○　多くの人がラグビー日本代表に関心を持つようになったタイミングでの放送で、時宜を得た内容でよかった。リーチ選手の留学当時の写真や関係者のインタビューをまとめることで、見ごたえのある内容になっていた。今でも札幌山の手高校に留学生が来ており、部活自体にも変化が起こっているという点、若い世代が育ち日本代表で活躍したいと思えるような環境があるということは、見ていて明るい気持ちになる。ただ、最後のまとめが少し詰め込み過ぎという気がした。日本の社会の中で、数ではなくて個を尊重することが大事であるというメッセージは分かる。けれども、番組の内容とリンクしていない感じがして残念だった。最後の個性について知りたいと思うことが大切というメッセージは、技能研修生を取り上げた番組などでやったほうがいいのではないか。また、よいラグビーチームと望ましい社会というのは違うと思うので、よいチームの話をした後に多様性のある社会の話をすると、何かつながっていかない感じがする。今回の内容では詰め込み過ぎていてあまりつながらず、深みがないまとめになってしまったような気がして、もったいないと感じた。

○　民放の番組でも似たようなリーチ選手の特集がされていたが、それと比べても優れた印象はなく、時流に乗った感じで、残念な気持ちが残った。

○　献身的な日本代表チームができた大きな理由がつかめたような気がした。日本代表選手の多くは外国出身だが、日本人のようになるのではなく、日本のやり方に自分たちの文化の長所を付け加えていくことが求められていると彼らは考えたのではないか。言葉では簡単だが、日本でそれをやっていくのは、とても大変な熱意と粘りだと思う。同時にそれを受け入れた日本出身のチームメイトも立派であり、まとめたリーチ選手は人間としてもすばらしい人なのだと再認識した。また、リーチ選手だけでなく、札幌山の手高校の佐藤幹夫監督を紹介したことで、外国人を助っととしてではなくて、個人として見ようという話にスムーズにつながったと思う。しかし、終盤の高校ラグビー全道大会の決勝戦の試合展開の伝え方が、あやふやに終わった感じがした。今回の試合では考えるラグビーができなかったことをきちんと伝えるべきだったと思う。

○　全国放送のスポーツ番組とは違った、札幌放送局ならではのアプローチで、リーチ選手と札幌山の手高校を取材しており、とても興味深く見た。佐藤監督から見たリーチ選手、そして日本の父母となった下宿先の夫婦の話なども、もっと深く見たかった。スタジオゲストのノンフィクションライターである山川徹さんのコメントもとてもよく、選手のルーツを生かして一人一人が持ち味を発揮するのが今の日本代表チームの強さであり、多様性のスポーツであるラグビーの精神にもつながっていくという説明は、とてもふに落ちた。また、スタジオの最後の話に、かつては助っととしてしか

見られていなかった外国人選手が、今は個として、個人の顔として見られるようになってきたという大切な指摘があった。同様に技能実習生や外国人労働者も今は数でしか見られていないが、個に意識を向けていけるようしていけたらという趣旨の話もあった。駆け足過ぎて話が飛躍していたかと思ったが、とても大切な話を伝えようとしているという意気込みは受け止めることができた。一方で、ＶＴＲ後にスタジオに戻った時のアナウンサーの話が、毎回まとめ過ぎという印象で、解釈は視聴者に委ねてもよいのではないかと思う。今回は　　ＶＴＲ自体がきちんと力のあるものだっただけに、コメントの押しつけ感が気になった。

○　番組のメッセージはよく理解でき、すばらしかった。現代社会は人種の違いや障害の有無などによって差別されない多様性を求められている時代だが、一方でさまざまな弊害によって息苦しい世の中になってきているのではないかと思っている。そういった問題を掘り下げていく、問題を提起していくところにこそ、北海道クローズアップの価値があると思う。問題提起番組としての北海道クローズアップの存在意義を、これからも出してもらいたいと思う。

（ＮＨＫ側）

リーチ選手が高校生の時に札幌にいたころからの方々への取材や写真などから、リーチ選手が多様性のある日本代表チームのリーダーに至るまでの背景を少しでも伝えられたらという思いで制作した。スポーツを語るというよりも、多様性のある人たち同士がどのように協力しお互いを高め合っていくのかということを伝えたかった。生放送で伝えたが、番組前半のスタジオ部分に時間を多く使ったため、終盤のスタジオ部分が駆け足になり、詰め込み過ぎという印象を視聴者に与えてしまったかもしれない。

○　１１月１５日(金)の北海道中ひざくりげ「木工職人　夢を削り出す～置戸町～」を見た。職人を育てるために大きく門戸を開いていることは、本当によい試みだと思う。しかし、　自分の力で自立しなければならない木工職人の世界は本当に厳しいのだと感じた。番組では、自分で制作したものを自分で販売するのかどうかがよく分からなかった。木工職人はセンスも大事だと思うので、オリジナルブランドを確立するには、一生懸命勉強しながら、腕も磨かなければならないと教えられた気がする。

○　番組の持ち味と温かみのある木工職人の手仕事の話がうまく調和していて、魅力的に仕上がっていた。木工職人たちにフォーカスした作りは、見ていて感情移入しやす

かった。自分の作品を作りたいと思って置戸にやってきた前田めいさんと木工職人を目指す齊藤陽英さんという、性別も年齢も経歴も全く違う２人も興味深かった。ただ、この２人以外の塾生が画面に出て来なかったので、この養成塾がどれくらいの人数を抱えているかなどの概要をもう少し知りたくなった。オケクラフトが生まれた経緯や独自性についてもう少し説明があったほうが、より理解が深まってよかったと思う。そして、養成塾や木工作家に対する、置戸町としての支援システムがどうなっているのかという点も気になった。２年の研修を終えた後のフォローアップはあるのかなど、自治体としてどのような取り組みを行っているのか知りたかった。今回は塾生や卒業生の個人にスポットを当てていたが、移住と就労を促進して、自治体の産業を育てていくという取り組みとして見たときには、どのような形で行っているのかを見たいと思った。

○　１０月２９日(火)のプロフェッショナル　仕事の流儀「あなたらしく、笑顔で生きて～精神科医・本田秀夫～」を見た。番組の中で普通とは何か、幸せとは何かを医師が考え続け、子供や成長した患者と向き合う様子に自分の周囲の親子の姿も重なって、非常に考えさせられた。どこまでを障害と見なして、どこからを普通と見なすのか。ある社会の中ではじかれると生きづらさを抱えてしまう、その背景について語っているところにも強く共感した。それぞれの特徴は個性の一部であって、治療してなくなるものではなく、誰もが幸せに生きる権利を持っているということを再確認できた。そして、彼らを支えるためにも社会全体でこの理解を共有する段階にあると強く感じた。

　また、立て続けに発達障害関連の番組があったが、何か意図的なものがあったのか教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

　去年秋に引き続き、「発達障害って何だろう」というキャンペーンを実施しており、さまざまな番組で関連する内容を取り上げている。特に今年はデジタルでの展開にも力を入れ、特設ホームページなどを設けて集中的に行っている。

○　１０月３０日(水)のクローズアップ現代＋「長引くひきこもりの陰で～見過ごされる中高年の発達障害～」を見た。発達障害というとどうしても子供のイメージが強いが、診断がつかなかったがゆえに見過ごされてきた発達障害を持つ大人が、苦手な環境に置かれることで二次障害を発症して、うつで自殺をしたり、引きこもりになったりする。障害に対する理解を広めるという意味もあったと思うが、あえて略語や専門用語を使わずに、この人はこういう部分が苦手というように、具体的な特性を表示し

て取り上げておりとてもよかった。身近にいるはずなのに見過ごされてきて、何ら配慮のないまま二次障害を発症したというケースがあるということをいろんな人に伝える意味でも、とてもいい企画だった。ただ、紹介されていた当事者は、自分の障害に向き合えていて支えてくれる人がいた。もっと深刻なケースも数多くあると思うので、取り上げてほしい。

○　１１月１０日(日)のＮＨＫスペシャル　ダビンチ・ミステリー第１集「幻の名画を探せ～最新科学で真実に迫る～」と１１月１７日(日)の第２集「“万能の天才”の謎～最新ＡＩが明かす実像～」を見た。ダビンチの名画がどのように作られたかを最新の科学を使って明らかにする番組は、ＮＨＫならではの内容で見応えがあった。第２集では、最新のＡＩの技術を使って、ダビンチがどういうことを考えていたのかということを明らかにしていた。この番組に限らずＮＨＫはＡＩを使って番組を作っているが、ＡＩができることと、ＡＩがやれることを作り上げるために人間がしている努力との境目がよく分からないことが多い。人間がとても苦労していろんな微調整を繰り返しているところをはっきり区別して見せたほうがいい。区別しないと、ＡＩは思っている以上にすごいものだと視聴者が思い込みかねないのではないか。見る人がＡＩはどういうことができるのかというのを理解する番組になってほしかった。そして、人間がどれくらいの資金を費やしてＡＩの仕組みを作っているのか。そういうところがもっと伝わるような番組を作ってほしい。

○　１１月１３日(水)の歴史秘話ヒストリア「網走監獄　最果ての苦闘」を見た。国道３９号線は、明治時代の囚人の苦労のもとに原野が切り開かれたということも、番組で詳しくやっていて、改めて考えさせられる番組だった。オホーツクには、北の果てやとても寒い所というイメージを抱いている人もいると思う。監獄という暗いイメージもある中、番組では女性キャスターがいろいろなことを楽しそうに体験されておりよかった。また、寺の住職である寺永法専さんが、明治の恩赦の際に、出所した囚人を保護し、世話をしていた話は聞いたことがなかったので、この話はきちんと語り継いでいく必要があると改めて思った。刑務所のある街が暗いイメージだけではなく、今後も監獄が観光に結びつきながら発展していけるように、多くの人にこの番組を見てほしいと思った。

○　１０月２６日(土)のＢＳ１スペシャル「是枝裕和×ケン・ローチ　映画と社会を語る」を見た。とても気になっている映画監督の２人がお互いの作品について語り合い、少し突っ込んだやり取りのある見応えのある番組だった。自分の用意してきたメモにあることをそのままぶつけながら対談をする是枝監督の姿に、彼の人柄がよく出ていた。また、日本語の字幕がついていたが、この２人の対談なら海外にも見たい方

がいると思うので、英語による放送も期待したい。

○　「にっぽん縦断　こころ旅」をよく見ている。俳優の火野正平さんの人となりが番組を通じて感じられる。思い出の風景を求めて自転車で走っていく途中、火野さんのその時々の会話の端々に、シニカルな面が顔を出し、楽しんで自転車に乗っているのが画面から感じられた。スタッフとの会話でも、一つのチーム的な感覚でとても面白い。坂道などを登るのはつらそうだが、できるだけ長く頑張ってもらいたい。

ＮＨＫ札幌拠点放送局
番組審議会事務局

２０１９年１０月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

１０月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、１６日(水)、ＮＨＫ札幌拠点放送局において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、北海道スペシャル「アイヌとＧＨＱ～マッカーサーの神棚の謎～」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、１１月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	山下　徹也	((株)グローバル経営センター　代表取締役専務)
副委員長	蛭田亜紗子	(小説家)
委　　員	今村　江穂	(NPO 法人子どもと文化のひろば ぷれいおん・とかち　理事長)
	嘉指　博行	(北海道新聞社論説委員)
	桐生　宇優	(北雄ラッキー株式会社　代表取締役社長)
	倉本ひと恵	(オホーツクベーグル　代表)
	齋藤　拓也	(北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　准教授)
	佐々木良榮	(デザイナー、(有) 良栄・ＰＬＡＮ　代表取締役)
	船山　大介	(特定非営利活動法人　Ｎｏ Ｌｉｍｉｔｓ　理事長)
	村田　博	((株)村田商店　代表取締役)

（主な発言）

＜北海道スペシャル

「アイヌとＧＨＱ～マッカーサーの神棚の謎～」

(総合　１０月４日(金)後 7:57～8:42 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)について＞

○　アイヌの伝統的な楽器であるムックリの音で始まり、ムックリの音で終わる構成で、番組の印象がしっかり残った。北海道に住んでいてアイヌ文化に触れていても、彼らが政治的にどういう立場にあったかということを勉強する機会は少なく思う。民族問題は扱い方がとても難しいが、日露戦争で勲章も受けた北風磯吉さんというアイヌの男性のドラマを通じて表現されていて、わかりやすかった。ＧＨＱが農地改革でアイヌからも土地を取り上げたことに驚いた。磯吉さんが遺言で、アイヌではタブーとさ

れる解剖を希望したことに、アイヌの誇りを持ちながらも、政府や北海道の人にアイヌも同じ和人として受け止めてほしいという強い思いが秘められているのではないかと思った。また、番組で紹介されていた名寄市北国美術館にも行ってみたいと思った。

○　それぞれのエピソードはとても興味深く驚くことばかりだったが、個々のエピソードのつながりがよく分からなかった。取材にあたっては、アメリカの公文書館やマッカーサー記念館まで訪ねており、しっかりと丁寧にされていると思った。また、元ＧＨＱの通訳だった女性が、７０年前に自らが白老町を訪ねた映像を今でもタブレットで見ているということにも驚いたが、ＧＨＱでは、その当時から女性を登用していたことも、とても興味深かった。アイヌが神棚にＧＨＱの最高司令官だったダグラス・マッカーサーをまつったというのはとても驚く発見であり、それを伝えようという意図は分かる。しかし「マッカーサーに自由と平等な世界を求めて」とまでいうには、説得力が弱いと思った。信仰の解釈はさまざまなので、もう少し慎重に扱ったほうがいいのではないかと思う。

○　番組がムックリの音から始まるのは導入としてよかった。磯吉さんと白老アイヌの長老である宮本イカシマトクさんという正反対の生き方をした２人のどちらがアイヌの生き方として正しかったのか。結論は出せないが、アイヌの人たちの歴史を知る意味でとても有意義だった。彼らがＧＨＱのマッカーサー元帥に接触を求めたのは、和人と同じ地位を得るためにも、アメリカに自由と平和、平等を見いだしたからではないかと想像する。しかし、正反対の生き方をした２人の人生を映し出したために、別の物語だと感じてしまい、内容がふに落ちてこなかった。自身もアイヌであるアイヌ文化研究者の萱野茂さんが 1994 年にアイヌ初の国会議員になり、1997 年に北海道旧土人保護法が廃止されてから２０年以上たっているが、その間にアイヌに対する国民の理解はどれだけ浸透したのか。また、巨額の投資をして白老町にアイヌ文化の発信の拠点として民族共生象徴空間を作る意図は一体何なのか。そこまで追及して調べてもらえればよかったと思う。

○　アイヌの方たちが戦後苦労して今の地位を獲得したということが、この番組を通じて大変よく理解できた。ＧＨＱとアイヌのつながりについても、この番組で初めて知ることができた。しかし、磯吉さんが神棚にマッカーサーと米国産のたばこの包装紙をまつっていた理由については、最後まで疑問が残った。また、アイヌのふだんの生活や選挙権獲得を伝える古いニュース映像もあり、当時の様子がわかりとても興味深く感じた。白老町に来春オープンする民族共生象徴空間には国立アイヌ民族博物館などがあるということを知り、ぜひ訪れてみたいと思う。

（ＮＨＫ側）

戦後のアイヌの立場を考えた時に、磯吉さんとイカシマトクさんの２人が考えていた平和の意味は何だったのか。私たちが考えているものとは違うニュアンスがあるのかもしれないと思い、別の習慣や文化を持った隣人や和人とどう共存していくのかをベースにして伝えた。アイヌは争いを好まない民族と言われることがあるが、戦いをしなかったわけではない。その辺の複雑さを単純化せず、より正確に理解することを目指したが難しく、磯吉さんがマッカーサーに何を求めていたのかについて明確な答えは得られなかった。しかし、取材をしていく中で、アイヌとして自由と平等を願い続けた思いを感じたので、その思いを感じてもらえるように番組を制作した。

○　磯吉さんの遺品から見つかったマッカーサーをまつった神棚を手がかりに彼の一生を明らかにし、それと同時にアイヌの苦難の歴史や死生観を説明していく構成は、全体として見応えがあった。また、アイヌの人々が国家や国際政治の観点から東西の冷戦構造の中でいかに翻弄されてきたか、番組を通じて初めて知ることも多かった。番組全体の主張として、アイヌの人たちがいかに法的、制度的に差別を受けてきたかが問題になっており、それが現代でも回復されていないということが論点になっていると思った。さまざまな方への取材も交えて、綿密な番組作りがされているという印象だった。しかし、先住民族の権利に注目する番組であるだけに、今年施行されたアイヌ新法と結びつけることができたらよかったのではないか。非常に優れた番組ではあったが、現在に結びつける要素、主張は弱いと感じた。

（ＮＨＫ側）

現在のアイヌに対する施策や文化の伝承、共存の意義については、これからも議論は続くので引き続き取材し、伝えていく。

○　大変見応えのある番組だった。磯吉さんを通して描かれた、それほど昔ではない時代のアイヌの苦労と当時の状況に驚いた。マッカーサーを神棚にまつった理由は分からないままだったが、和人に対して諦めがあったのではないかと想像した。そして、1947 年にイカシマトクさんがＧＨＱを直接訪問していたことにも驚いた。ＧＨＱの通訳をしていた女性が、今もタブレットで当時の映像を見ていると知り、その心境をもう少し知りたかった。磯吉さんの遺言に近い音声データは、平和の意味を考えさせられる内容で思わず涙が出た。また、神棚がどういうものかということを考えさせられた。より多くの人たちに知ってもらいたい内容の番組だった。

○　アイヌとＧＨＱの関連性はすぐに思い浮かばないだけに、タイトルのインパクトはとても大きく興味をそそられた。日露戦争での功績をたたえられているにも関わらず、磯吉さんはなぜ神棚にマッカーサーをまつっていたのか、謎を解き明かすような展開にもどんどん引きつけられた。また、イカシマトクさんというアイヌの別の長老にもフォーカスしており、２人の生涯を知ることで、重層的にアイヌの苦難の歴史を感じ取ることができた。磯吉さんの戦前と戦後での心境の変化と、アイヌの教えに背いて死後解剖を遺言にしたというのはとても印象的で、アイヌのルーツを解明してもらいたいという切なる願いに感銘を受けた。彼のアイヌ語の肉声のテープには、言葉は分からないが慈愛や優しさにあふれていることが感じられ、言葉の重みや、アイヌモシリという平穏な人間世界を希求する精神が流れているのだなと感じた。しかし、マッカーサーを神棚にまつった真意が何だったのか、理解できないところもあった。北海道のアイヌの人々の苦難の歴史と、平和を愛する精神文化が浮き彫りになっており、見応えのある番組だった。

○　アイヌとＧＨＱのつながりをイメージできなかったが、タイトルにとても引きつけられ楽しみにしていた。膨大な資料と、国内外の関係者へのインタビューも非常に分かりやすく、アイヌが歴史の中で翻弄されていたということも伝わった。番組全体として取材のスケール感も非常に大きく、北海道だけではなく、全国の方にもぜひ見てもらいたいと思えるような内容だった。アイヌは独自の文化を持っているが、それぞれの言語や文化を尊重し合う土台がなければだめなのだと、この番組を見て大変勉強になった。

○　とても面白く、謎を解いていくミステリーのような構造にも非常に引きつけられた。時間の短さを感じさせないほど、充実した内容だった。ＧＨＱの農地改革はアイヌにとって厳しいものであり、視点が変われば印象も変わるという当たり前のことに気づかされ、時代や歴史の皮肉を感じた。ＧＨＱで通訳をしていたという９０代のアメリカ人女性が所持していたアイヌの人々を記録した映像はとても魅力的で、映像が持つ力の強さを改めて感じた。晩年の磯吉さんが残した音声に「にこやかな気持ちで考えている」とあったが、胸の内にある恨みや後悔の念などさまざまな思いをすべて飲み込んで出てくるあの言葉に、とても重いものを感じた。そして、白老町の民族共生象徴空間オープンに向けて職員みんなで用意を進めている姿を見て、磯吉さんのこの文化を大切にしていきたいという気持ちが、長い時間を経て現在に受け継がれようとしていることに、とても胸が熱くなった。なぜ神棚にマッカーサーをまつっていたのか、答えは出なかったが、日本に失望して、ＧＨＱやマッカーサーのことを暮らしや社会制度を変えてくれる救世主として見ていたのではないかと感じた。近代から現代におけるアイヌ全体の話だったので、「アイヌとＧＨＱ」という限定的なタイトルには違

和感を覚えたが、逆に両者が全くつながらなくて気になり、見てみたいと思わせるという意味では、非常に魅力あるタイトルだと思った。

○　密度の濃い、非常に見応えのある番組だった。初めて知る北風磯吉という人物について、日本人として出兵した日露戦争での武勇伝が子どもたちに語られるまでになりながらも、晩年はひっそりと炭焼きをしながら生活するという経緯が非常に分かりやすく描かれていた。最後は日本人よりもアイヌとしての尊厳を保ちながらも風習に背いたという無念さが、とても強く伝わった。また、アイヌの方たちは文化的にも生活的にも、いろいろ差別されてきた側面があるということを番組は伝えていたと思う。磯吉さんが和人に認めてもらうためにしてきたことが、戦後の体制で変わってしまい、神棚にマッカーサー元帥をまつったのは、和人に絶望した磯吉さんからの最大の皮肉だったのではと感じた。また、イカシマトクさんを描いた部分からは、アイヌの権利回復への期待といった、アイヌの方たちの心情が非常に分かりやすく伝わってきた。農地改革で土地を失い、何を言われてもアイヌの文化を伝承していくという活動についても、イカシマトクさんのお孫さんの口からとても分かりやすく説明されていた。視聴者に対しては、その両者に共通するところを簡潔に伝えるが、明確な答えを番組としては提供しないという形の番組構成だったと思う。

＜放送番組一般について＞

○　９月２０日(金)の北海道中ひざくりげ「湯煙る街で熊は舞う～登別市～」を見た。中学生が伝統的な儀式にチャレンジしてそれを成し遂げるという、青春群像を伝えるものだった。このような番組では、出演者が泣くことを前提にカメラを回す場面が多くみられて嫌気がさしたことがある。この番組でも生徒や先生が涙を流す場面はあったが、取材のしかたに一定の距離を感じられ、素直に見ることができた。

○　１０月４日(金)の北海道クローズアップ「“人慣れ熊”の悲劇～なぜヒグマが街に～」を見た。番組の冒頭で、札幌市の熊の出没件数が紹介されていたが、2016 年の３３件に比べ、今年は現段階ですでに 180 件以上あり、実際にこれだけ増えているというのは衝撃だった。知床で熊にカメラを取り付けて生態を調査することで、なぜ熊が人に慣れていくのかということを明らかにしていく。それに対して人間は何をするべきなのかということが、はっきり示されており、非常にいい番組だった。また、知床には道外や海外からの訪問者も多いので、全国に向けて放送してもいいのではないか。しかし、人里に出てくる熊の問題という共通点はあるが、札幌と知床の熊の出没を“人慣れ熊”とまとめてしまうのは分かりづらい気がする。同じように説明されても、札幌のほうは、なぜ人慣れなのか分からないところがあった。

○　番組冒頭、知床の熊に取り付けたカメラで撮影した熊目線の映像を使っており、見たことのない映像でわくわくした。しかし、子熊のかわいいマユコが、やがて人間に慣れて人里に降り、最終的には射殺されてしまう。わくわく感があったので、とてもショッキングだった。その分、熊が人に慣れるということの悲劇性、問題性が皮膚感覚で伝わってくるような演出になっていたと思う。後半は札幌市南区のことが取り上げられていたが、その一因として、自然と人間とのバランスがぎりぎりのところで保たれているゆえに、わずかなことで崩れてしまうということを考えさせられた。南区の熊の射殺についても賛否があり、否定があるということは熊が人里に慣れることの危険さが伝わっていないところもあるのだと思うので、この番組で人慣れ熊の悲劇の具体例も見せて伝えてくれて、とてもよかったと思う。

○　熊に遭遇した場合は絶対に近づかないと思うが、知床では車から降り熊に近づくという危険な行動を取った観光客の映像があった。私たちのこのような軽率な行動によって、人慣れから駆除対象になってしまう原因の一つだと思う。ただ、最近は札幌市でも熊による被害が多くなっていて、増え過ぎてしまった熊は駆除されてもしかたがないだろうという思いもある。また、知床を訪れる人は、道内より道外や海外の方たちが多いように感じるので、注意喚起の意味も含めて全国で放送するとよいのではないかと思う。

○　知床で、カメラをもって熊に近づいていくという観光客の行動は大きな問題だ。これからどう対処していくべきなのか。下手をすると知床の世界自然遺産登録が取り消されるという可能性まで含めて考えていかなければならない。

（ＮＨＫ側）

札幌では知床のように観光客が近づいていくことはない。環境科学研究センター農学博士の間野勉さんは、熊は山奥に限らず住宅街の近くにもおり、そこで親熊から子熊へと代を重ねていくうちに、人間は自分たちに危害を加えないということが、すり込まれているのだろうと話していた。今回は、前半で知床の現状を見ていただき、その上で、札幌の熊が人慣れ熊なのかどうかを後半で考えていくことにした。しかし、指摘があったように、観光客が近づくことと、札幌のように住宅街に現れることで人に慣れていくのではないかという疑問は、分けて考える必要があり、札幌の映像の前にひと言あってもよかったかもしれない。

○　１０月１１日(金)の北海道クローズアップ「名馬の遺志をのせて～馬産地・北海道世界最高峰への挑戦～」を見た。北海道は世界有数のサラブレッド生産地であり、北海道から世界に向けて挑戦しているにも関わらず、北海道の馬産に対する応援を少なく感じていたので、番組を通して「北海道から挑戦している」ということを伝えてもらえてよかった。世界の頂点である凱旋門賞を目指す対照的な２つの牧場を取り上げていたが、手法は違っても世界を目指す熱意は変わらないということはよく伝わった。今回の凱旋門賞には、日本最強とされる馬が出走していなかったため、結果は見えていたかと思うが、勝ち負けとは違った生産者の意欲に焦点を当てた番組を作ったということが、とてもチャレンジングでよかったと思う。

○　血統のよい競走馬の金額や、調教のための最新施設など、ふだん知りえない情報を知ることができ、とても興味深い番組だった。しかし、それぞれの話が魅力的で面白かっただけに、見方によっては幾つもの番組ができそうな内容で、何に焦点が当てられているのかがぼんやりしてしまった感じがある。また、今回取り上げられなかった牧場の情報もあってもよかったのではないか。タイトルの「名馬の遺志をのせて」というタイトルから抱くイメージよりも、凱旋門賞の舞台裏といった印象が残った。親子３代に渡り牧場を経営している下河辺行雄さんの、ディープインパクトの血筋を残そうとする話では、もう少し思いを聞きたかった。下河辺さんの言葉を聞いて、北海道は農業だけではなくて世界に通じる馬産という産業があるのだ、ということを強く感じた。そして、下河辺さんの牧場でディープインパクトの血を引く競走馬であるキセキの弟が生まれているという話を聞いて、こうして産業が発展していくのだなと感じた。

○　日本トップレベルの競走馬の牧場と、親子３代にわたり経営されている牧場という、同じ北海道でも全く違う環境を取り上げていて、とても面白かった。高値で競りの様子から、穏やかに見える下河辺さんも繁殖に多額の費用をかけている勝負師なのだということを想像させられ、決してきれいごとだけでない競馬の世界が見られてよかった。レース後の下河辺さんの晴れやかな表情は、すでにこれから先を見ており、見ている側にとっても明るい気持ちで番組を見終えることができた。

○　本当にすばらしい内容だったが、制作者の熱意が強過ぎたのか、何を訴えたいのかがぼやけてしまっていた。しかし、騎手にカメラをつけて走らせた映像は、馬に乗っているかのような迫力がありよかった。浅野里香アナウンサーのナレーションも、それぞれの場面に合った落ち着いた感じで、番組の雰囲気を締めるような効果がありよかったと思う。

○　１０月１４日(月)の「ファイト！糸くずのような命の唄」(総合　後 10:30～11:20 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。以前「北海道クローズアップ」で前編と後編に分けて放送されていたが、後編にもの足りなさが残っていた。しかし、今回は出演者の１人である飯島啓方さんという視点が加わり、人々のやり取りが丁寧に描かれて、楽しく見ることができた。だが、前後編をつなげて再度放送したのはどうしてなのか。タイトルと内容があまり結びつかなくて気になった。

○　以前の前編、後編よりも格段によくなっていた。今回は飯島さんが登場することで、チーム内の人間関係や、それが冒険の中でどう変わっていったかがうかがえる作りになっていて、単なる総集編ではない、新しい視点や奥行きがあったと思う。また、番組終盤には複数の参加者から「役割」ということばが出ていて、組織の中のそれぞれの役割という裏テーマのようなものも見えてきて、より深く余韻の残るものになっていた。

（ＮＨＫ側）

出発前の訓練から見せたほうが、参加者の顔も見え感情移入などもしやすく、インタビューを加えることによって、さらによい番組ができるだろうと制作をした。また、「ファイト！」というタイトルは、出演者の１人である西郷琢也さんが番組の冒頭と最後に、中島みゆきさんの「ファイト！」を歌っており、この番組自体も彼らを激励したいという気持ちもあってつけた。

○　１０月２日(水)のクローズアップ現代＋「追跡！ネット通販　やらせレビュー」を見た。日本語のおかしなレビューが多く見られると思っていたが、偽レビューの書き込みやＩＴを駆使して自動的にレビューを書かせることが横行している現実があるということだった。そういう時代になったのか、と驚いた。

○　１０月３日(木)の所さん！大変ですよ「夫婦あわせて２０１歳　健康長寿の秘けつとは？」を見た。健康や長寿というキーワードは、民放を含めいろいろな番組で取り上げられており、ＮＨＫとしてどのような姿勢でこの番組を放送しているのかという観点で見た。何を食べたらいいかといった番組が多い中で、この番組は「幸福度が高い人が長生きできる」というキーワードで番組を作っており、とても好感が持てた。また、夫婦の在り方自体が今後変わっていくということも、この番組を通して伝わったのではないか。

○　１０月１２日(土)のＳＷＩＴＣＨインタビュー　達人達（たち）「沢則行×宮城聰」

を見た。札幌出身である沢さんの作った人形は非常に独創的で美しく、魅了されるという言葉に尽きるすばらしい芸術家である。人形という「命のない異物を命あるものとして接する人形遊びは本能に根ざしている。人形劇を見ることで異世界を信じようとする機能が呼び戻される。」という沢さんの言葉がとても印象的で、舞台芸術の価値を再確認できるものだった。また、宮城さんの「社会の安定、強じんさのために異物を排除しない」「楽じゃなくてもおもしろくできる」という思いが舞台作品に反映されて、魅力を増しているのだと感じた。２人の共演が実現して、作品で舞台芸術に対する社会の関心を喚起できればすばらしいと思う。

○　連続テレビ小説「なつぞら」を見ていた。半年間とても楽しみで、主人公だけではなくて家族やその周りの思いにも感動できる、見応えがあり印象に残る朝ドラだった。しかし、非常に楽しく見ていた反面、開拓精神を身につけた主人公が成長していく物語に、アイヌの人が一度も出てくることはなく、考えさせられるものがあったように思う。

○　台風１９号の際、東京にいたので、台風１９号の報道を見比べた。ほかのメディアと比較して、ＮＨＫの情報量は圧倒的で、公共放送としての本領を発揮していたといえる。

○　台風１９号にかかわる災害報道について、聴覚に障害がある家族と一緒に見た。聴覚障害者は情報を得にくく、特に避難所での情報取得の問題はニュースでも取り上げられている。生放送は字幕が遅れてしまうが、画面の上下左右に映される文字スーパーの情報量が非常に多く、それで情報が得られ、画面左下の二次元バーコードでさらに詳しい情報が得られて、何をすべきかが分かると言っていた。ただし、高齢者の方が同じように利用するのはなかなか難しいかもしれない。また、ネットでも話題になっていたが、高瀬耕造アナウンサーの報道姿勢は、単に情報を伝えるのではなく、その情報の中身をきちんと理解してもらうという域まで達しており、すばらしいと思う。ＮＨＫ全体の姿勢だと理解されて、好意的な反応が多かったのではないか。

（ＮＨＫ側）

　命と暮らしを守るために、細かい情報をわが事のように受け止めてもらうことを考えて日々の業務に当たっている。しかし、その呼びかけが行き届かなかった現実もある。より多くの方々に見ていただいたり、スマートフォンで情報を取っていただいたりするための工夫に、より一層力を入れたい。

○　国際芸術祭「あいちトリエンナーレ 2019」の企画展「表現の不自由展・その後」のニュースについて、抗議活動をしている名古屋市長の様子は、それに賛成する街の声も含めあまり映されることがなかったように思う一方で、ＳＮＳでは反応が大きかった。現代ではＳＮＳによる情報量が多く、誤った情報だったり偏った方向だったりにも拡散されてしまう怖さがある。表現の自由もあり、とても難しい問題ではあるが、誤報を防ぐためにも出せる情報はすべて出して、個人に判断を委ねるのも一つの方法だと感じた。

（ＮＨＫ側）

ＳＮＳは情報過多でフェイクニュースもあるが、それを否定するのもニュースである。間違いを証明するのはなかなか難しいが、ファクトの積み重ねを大事にしている。ＳＮＳを利用している方が、フィルターバブルのせいで自分が見たい情報しか見えなくなることがないよう、これからもメディアの在り方を考えていきたいと思う。

ＮＨＫ札幌拠点放送局
番組審議会事務局

２０１９年９月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

９月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、１８日(水)、ＮＨＫ札幌拠点放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、２０１９年度後半期の国内放送番組の編成について説明があり、２０２０年度の番組改定とあわせて意見の交換を行った。

続いて、北海道スペシャル「胆振東部地震から１年～被災地はいま、そしてこれから～」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、１０月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	山下　徹也	((株)グローバル経営センター　代表取締役専務)
副委員長	蛭田亜紗子	(小説家)
委　　員	今村　江穂	(NPO 法人子どもと文化のひろば ぷれいおん・とかち　理事長)
	嘉指　博行	(北海道新聞社論説委員)
	桐生　宇優	(北雄ラッキー株式会社　代表取締役社長)
	佐々木良榮	(デザイナー、(有) 良栄・ＰＬＡＮ　代表取締役)
	成田　正夫	(ながぬま農業協同組合　代表理事組合長)
	船山　大介	(特定非営利活動法人　Ｎｏ Ｌｉｍｉｔｓ　理事長)
	村田　博	((株)村田商店　代表取締役)
	柳谷　君予	(NPO 法人ﾜｰｸﾌｪｱ ｵﾎｰﾂｸ若者ｻﾎﾟｰﾄｽﾃｰｼｮﾝ総括ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ)

（主な発言）

＜北海道スペシャル
「胆振東部地震から１年～被災地はいま、そしてこれから～」
(総合　９月６日(金)後 7:30～8:42 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)について＞

○　このタイトルだけを見たときは、災害後１年が経過した現状を視聴者に見せる番組ではないかというイメージを持っていたが、切り口が少し違っていて意外だった。番組ゲストに鈴木直道知事や秋元克広札幌市長、宮坂尚市朗厚真町長を迎えて、１年たった現状を取材した映像を見ながら、生放送で視聴者からの質問も受けるという番組はチャレンジングな気がした。また、知事に答えを促そうとする野村優夫アナウンサーの質問の姿勢に、彼の持ち味が出ていた。冒頭で紹介されていた農家の

山本隆司さんの言葉がとても印象的で、家族を一度に失った思いと、残された意味を考えて前向きに生活していかなければならない現実があるのだということを知り、非常に心にしみた。国から５４億円が支援されているという話が出ていたが、どのように使われているのかが分からなかった。また、厚真町民の方々はその内容を知っているのかも気になった。そして、このような災害に遭っても、署名をしなければ支援を求められないのが現状なのかと思うと、市町村と道、そして国の連携が取れていないことを非常に不安に感じた。また、紹介されていた鳥取県の事例と比べて、北海道の災害対策マネジメントが非常に遅れているということも感じた。記者が仮設住宅に出向いてアンケートを取ったという話から、とても丁寧に取材していたのだと強く感じた。それだけに、１年たってもまだこんな悲惨な状況なのだという現状が見えて、どの地域でもいつ同じことが起きるか分からないという、本当に考えさせられるきっかけになった内容だった。ブラックアウトについても、上士幌のような各地の取り組みや、民間企業も考えていかなければならない時代だということも、分かりやすく表現されていた。しかし、放送中にどんな質問がどれぐらい届いたのか、といったことが気になった。

○　高齢者の方々の「この年になってから家を建て直すのは無理だ」という話の中で、野村アナウンサーが知事に詰め寄る姿勢が非常に印象的だった。また、スタジオでは、支援を求める署名を道が受け取る、受け取らないの議論もされていたが、“自助”という点でどれだけ備えていたのかも知りたかった。鳥取県の災害支援マネジメント例を出されて、知事も非常に勉強になったのではないかと思う。同じことを北海道でもやっていけるかは不明だが、官民が一体となって災害支援マネジメントを進めていかなければならないと思った。また、今回は住宅に焦点を当てていたが、農業や工業の公共施設はどれくらい復旧されたのかが見えず物足りなさを感じた。

○　知事や自治体の首長が出てくる番組は、外国だと多い気がするが、そういうことにチャレンジする番組かと思った。町長と市長と知事が意思を疎通させ新たな展開を、という目的だったと思うが、政治家が生放送で言い切るのは難しいのだと感じた。しかし、これからの新しい番組のあり方としてチャレンジしてほしい。ただ、個人の財産である住宅の再建にもっと公費を投じていいのではないかという方向で番組が進み、知事からそういった答弁を引き出そうとしているように見えた。署名が出されたこともあって、一つの見方なのだと思うが、それが道民全体の意見なのだろうかという感じもした。過去にも甚大な被害はあり、そもそも日本において災害はたくさんある。過去の事例を分かった上で、鳥取の事例も参考にし、住宅再建にどれだけ公費を投じるのか、考えていきたい問題だと思った。

○　野村アナウンサーの何とかして真意を引き出そうとする熱い姿勢が、この番組ではとてもよく生きていた。番組を見ていた被災者の人たちは、「自分たちの代わりによく聞いてくれた」という思いだったのではないか。また、鳥取県の取り組みは、「こうあるべきだ」というきれい事で済まさずに、実際にやっていることを示していてとても興味深かった。被災した住宅を、私的財産だからどうにもできないというのではなく、やろうと思えばできるということを本当に具体的に北海道に対して突きつけていて、いい内容だった。ブラックアウトについては、送電線も原因だったとは、不意打ちを食らったような大きなニュースだった。ブラックアウトは絶対起こしてはいけないと思うが、厚真火力発電所に頼り過ぎていて、仕方がないかと感じるところもある。けれども、東日本大震災から７年もたっていた去年、送電線の耐震化がまだ不十分だったというのは、事業者の姿勢としてどうなのだろうかと感じた。

（ＮＨＫ側）

国からの支援金５４億円は道路や公共設備の建設などに使われ、個人の家は原則対象外だ。それでも厚真町では「個人の家が復旧できなければ地域が復旧できない」という理由で署名活動をされていた。また札幌市の例は異例の措置として番組で紹介している。公費をどこまで個人に使うのかというのは非常に難しい問題であるという認識を前提にわれわれも取材、制作にあたった。ただし生活再建のためにどこまで公費を投入するのかは、政治が決めなくてはならない問題でもある。この番組で私たちが見てもらいたかったのは、去年起きた災害に引き続きどう対応するのかということと、今後起きるであろう災害に私たちはどのように対応していくべきなのかということだ。それを考えるきっかけにしたく、知事や札幌市長、厚真町長にも代表として出演していただいた。

○　農機具が廃棄されて山になっていたり、神社じまいされたりという悲惨な状況は、地域にとってみれば一切のよりどころがなくなってしまうようなことであり、そういう映像を出したのは、視聴者の心に震災の記憶を残すという点で大変よかった。また知事、市長、町長が生放送に出るということは、言葉一つ一つに責任の重みが伴う。知事も言葉を選びながらの答えになってしまったと思うが、生放送に出演したことに対しての勇気は感じた。あまりうまく喋れていない印象だったが、それはこれからの糧になっていくのだと思う。また、一般的な意見を求めるために俳優のスタジオゲストがいたが、もう少し専門的な意見が言える方が出演したほうが、首長への質問や疑問を呈することができたのではないかと思う。

○　厚真町の吉野地区の神社じまいの神事のシーンがとても印象的だった。個人資産である住宅の再建が難航するという現状はとても理解できるが、その結果、地域の存続そのものが脅かされて、地域一帯がなくなってしまうということを深く考えさせられた。家族も農地も失い絶望のふちから立ち上がろうとしている山本さんや、住宅や生活の再建途上の人たちが紹介されていたが、そういった方々に本当に寄り添う立場から、野村アナウンサーが知事などに問いかける番組のあり方に強く共感した。鳥取県独自の支援システムや伴走型の支援が先進事例としてあり、それを北海道として実現できるのかどうかを知事に追及する進行もよかった。その結果、知事の頼りない回答や自信のない表情などがつぶさに見られて、道民としてこのリーダーと一緒に、災害に強いまちづくりができるのか、大きな課題だと思って見た。番組の途中で、視聴者の声を紹介していたが、それを知事が読んでどう思われたのか、どういう考えに行き着いたのか、視聴者としては知りたいと思った。

○　災害というのは、生活が落ち着いてしまうと忘れてしまいがちだが、１年目の節目ということで、改めて当時を思い出し災害について考える非常によい機会になった番組だった。大きな被害に遭われた方の１年間を追った場面もあり、復旧・復興という一言で片付けられない多様な支援の必要性を、改めて考えさせられた。私的財産に対して公金を投入するという問題をどうすべきか、歯がゆい思いがした。また、知事がスタジオに生出演していることに本当に驚いた。立場上、生放送でうかつなことは言えないだろうと感じたが、知事にとっても多くの学びの機会になったと思う。そして、ブラックアウトの話では、北海道電力の担当者から原因について説明があり、興味深かった。また、この番組は字幕をつけて、耳が聞こえない方にも見てもらいたいと思った。

○　ひとつの地震の中で起きた災害だが、厚真町・安平町の被害状況と、札幌市清田区の液状化の問題、ブラックアウトは、災害としては別個のものだと感じ、３つの番組を見せられた気がしている。ひとつの時間枠の中で「胆振東部地震から１年」とくくってしまったので、見終わった後の印象が何となく分散してしまった。番組冒頭は被災者のいまの言葉から始まったので、現在置かれている現地の悲惨な状況が、いろんな方からいろんな声で聞ける番組なのかと思っていた。野村アナウンサーは必死に掘り起こそうとしていたが、生放送ゆえに知事などの発言が安全な方向に行ってしまったのが残念だ。アンケートやデータもとても大切で分かりやすいものだが、１年たったからこそ浮かび上がってくる個人の問題、個人の声や思いをもう少し拾えるとよかったと思う。行政は個人の財産には手出しできず、補助はできないとのことだが、その状況は地域によって違う。鳥取の事例が出て、それに対して何も答えることができなかったのは残念だった。

○　冒頭の厚真町でご両親と妹さんを亡くした山本さんの話はとても印象的で、番組に引きつけられた。その言葉の重さがいつまでも胸に残った。液状化の問題について、これまで取り上げられることのなかった近隣地区の問題も取材されていて、よかった。今回は液状化が起こらなかったが次はどうなるか分からないという場所について、限られた財源の中で制度をどう作っていくのかという問題提起は、今後もぜひ続けてほしい。野村アナウンサーの知事を追及する姿勢が、とても頼もしかった。また、鳥取の事例はとても興味深く、災害対策マネジメントで生活全般をきめ細かくフォローしていく仕組みもできていて、すばらしいと思った。鳥取県の元知事・片山善博さんの「北海道だからできない、というわけではない」という言葉が、鈴木知事にちゃんと響いたのだろうか、と気がかりだ。今回の番組は、道内各地の現状や住宅再建、自治体と民間企業との取り組みについての話題が中心で、今後の災害に関する制度などへの問題提起としてはとてもよかった。しかし、時間がたつにつれて、震災当時感じたことがどうしても薄れていくので、私たち一人一人が個人レベルでできること、しておくべき備えについても、いま一度考えるきっかけを提示してほしかったと思う。

○　非常に分かりやすく制作されていると感心した。震災から１年たった今、何が問題になっているのか。また、厚真町長と札幌市長、そして北海道知事と被災地それぞれの行政トップを呼んでの番組進行も、災害に対する問題について視聴者にとても分かりやすく訴えかけていたと思う。住宅問題やブラックアウトについても、１年たった今でもまだまだ解決できずに抱えている問題や、その解決に向けてそれぞれの団体や企業が、どのような災害対策を講じているのかも分かりやすく紹介されていて、本当に響いた。災害に強い自治体を目指していくのに、われわれ道民が行政に頼るだけではなく、地震保険の加入などを含め、道民自身が主体的に動くことを気づかせるような番組に仕上がっていたと思う。また、鈴木知事にとって番組出演はリスクもあっただろうが、「生の声を道民の皆さんに届ける」という使命を強く感じた。３人の首長がこの番組に出たことで、道民に対する大きな訴求力があったと思う。

＜放送番組一般について＞

○　７月１９日(金)の北海道クローズアップ「僕らが北極を歩くわけ～冒険編～」を見た。冒頭の北極の風景と、そこを歩く小さな人の群れと施設、そして見事なナレ

ーションで、一気に番組に引きつけられた。前回４月の「旅立ち編」の放送で気になっていた２人のメンバーにスポットが当たっていて、興味深く視聴した。冒険家の荻田泰永さんが怒る場面では、のんきに見せかけている荻田さんが若者１２人の命を預かっており、その重みがいかに大きいかが伝わってきて、はっとさせられた。荻田さんはいつもひょうひょうとしているが、とんでもないプレッシャーを背負っているのだ、と改めて気づかされた。今回は２５分ほどの番組で物足りなさを感じたので、「旅立ち編」の内容と合わせて、もっと長い尺の番組で見てみたいと思った。他のメンバーがどんな景色を見ていたか、どう過ごしていたかを知りたい。

○　８月１６日(金)の北海道クローズアップ「ディープインパクトが教えてくれたこと」を見た。競馬にはあまり興味はない者でも、ディープインパクトは知っている。安い競り値で買われた小さくて病気がちな馬が、まさか日本の記録を塗りかえるようになるとは誰も思っていなかった。一つのドラマのようだと思った。引退した後の種付けや、今までの競走馬の育成ではできなかった新しい発想の取り組みがディープインパクトの代になってできたことで世界の水準に追いついたことなど、ビジネスや経営という面でも大変勉強になった。

○　ディープインパクトに関わった人たちのそれぞれの気づきと、それまでの常識を覆す馬だったということが、分かりやすく伝わった。ディープインパクトを通しての成功体験により、競争馬産地の技術が世界水準になったということも、正確に伝えていると思った。

○　８月３０日(金)の北海道クローズアップ「外国人闇就労～人材不足ニッポンの実像～」を見た。すごい番組、すごい調査報道だった。とても難しいであろう取材に地方の記者が取り組んでいることに感動した。闇就労の実態を知らないかのように振る舞う建築現場に衝撃を受けた。働きたい人がいて、働いてほしい人がいるから成り立っているのだから「必要悪だ」という感覚が、現場にはびこっているのではないか。しかし、違法なので絶対に許すことはできないが、過酷な労働環境をしいられていた就労者だけが逮捕されてしまうのは、本当に悲しく思う。連れてきた人、送り込んだ人、雇っていた人を処罰する法律などがあるのかどうかについても知りたかった。

○　在留カードや一人親方カード偽造の問題の大きさに驚いた。ブローカーが言っていた「日本政府にもコントロールできない」という現実と、北海道だけではなく日本全体の大きな問題であることから、今後の外国人労働者の受け入れ政策に大きな不安を感じた。建設業などが多い北海道では決してひと事ではない問題だとシリア

スに描かれていて、私自身も入り込めた内容だった。この問題については、外国人労働者はみな違法就労だという誤解を招かないように注意しながら、今後もさらに踏み込んでもらいたい。

○　９月１３日(金) の北海道クローズアップ「目撃！千島列島～歴史と大自然に閉ざされた島々～」を見た。圧倒的な雄大さ、溶岩でできた岸壁の色や形は初めて見るもので、千島列島の美しさに驚き、手つかずの自然が北海道の近くにあることに安心した。千島列島には天売島にもいない海鳥がたくさんいたという報告があり、うれしく思った。カメラマンの寺沢孝毅さんが、どういう経緯でロシアの調査船に乗ることができたのか興味が沸いた。最近は災害とか虐待のような暗い気持ちになるニュースが多い中で、「いいものを見た」と明るい気持ちになって、いい時間を過ごすことができた。

○　千島列島の映像がすばらしく、感動した。特に、占守島の旧日本軍の陣地が、夏草に覆われた中、きれいな島の風景の一部として遺跡のように残っている。旧日本軍の占守島の攻防戦を経験した方たちは、ソビエトが北海道に侵攻してくるのを防いだという功績があるが、その多くはシベリアに抑留され、つらい思いをされた。そういう事情を知ってあの映像を見たら本当に感動した。

○　今まで見たことのない千島列島の自然を見ることができて、非常にわくわくした。圧倒的な海鳥の群れ、船の周りをイルカのように跳ねて泳いでいるトドやアザラシ、噴火した翌日の島など、見ごたえがあった。また、天売島に住んでいる写真家の寺沢さんにも興味を持ったので、続編を作ることがあれば、寺沢さんについても掘り下げていただきたい。

○　「ほっとニュース北海道」、９月９日からの週の“秋のグルメウィーク”を見た。新得そばと、そばで作ったシュークリームやソフトクリームなどはおいしそうで、ぜひ行ってみたいと思った。また、網走市長が網走監獄の博物館で監獄食を食べていたり、帯広市のビートの資料館を紹介していたり、いろいろと興味を持った。グルメの催しは今回で終わりということだが、季節ごとのグルメを番組で紹介してほしいと思う。

○　８月１０日(土)のＥＴＶ特集「忘れられた“ひろしま”～８万８千人が演じた“あの日”～」と８月１７日(土)の映画「ひろしま」(Ｅテレ 前0:00～1:47)を見た。オリバー・ストーン監督が「マスト・シー」と言っていて、そんな映画もあるのだと驚いた。８万８千人もの広島市民が「戦争の抑止になれば」という思いで体験を再

現した映画から、戦争の悲惨さを後世に伝えていかなければと強く感じた。当時の広島市民がどんな思いで再現したのだろうと考えさせられた。深夜に放送していたことが残念だったが、子どもたちにも、あるいは広島のことを実際に知らない人にも伝えていくためには、こういう映画を放送でやることは大きな意義があると思う。

○　映画「ひろしま」を見た。これを放送するということに大きな意味があり、感動しながら見た。偏りのない人間ドラマになっており、すばらしい映画だった。この映画が日の目を見たのは大変有意義で、いろんな人が見られる時間での放送をもう一度お願いしたい。

○　８月１２日(月)のＮＨＫスペシャル「かくて“自由”は死せり～ある新聞と戦争への道～」(総合 後 10:00～10:49)を見た。戦前に１０年間だけ存在していた「日本新聞」という右派メディアの記事を読み込んでいくことで、日本が大正デモクラシーの自由をおう歌していた時代から軍国主義へどう流れていったかをひも解く内容で、とても興味深く視聴した。世論とメディアと国のめざすべき方向性について、いろいろと考えさせられた。信州で音楽教師をしていた小林八十吉さんを軸に、デモクラシーをおう歌していた一人の市民が、昭和恐慌による農村部の困窮と挫折、そして国粋主義に転向するという流れをつぶさに追っていて、とてもリアルだった。７０数年前の出来事だとは思えず、現代の日本でも重なる部分が多く、見ていて恐ろしくなった。日本新聞は 1935 年に休刊したが、発刊していたたった１０年間で、最初は世間から大きく離れた極端な思想だったのが、世論の中心に躍り出たことに強い恐怖を覚えた。今、取り上げる意義がとてもあり、ＮＨＫでなければ作れない番組だと、とても強く感じさせられた。

○　８月１４日(水)の「おはよう日本」の中の特集「戦後７４年　戦争孤児“人生の空白を埋めたい”」を見た。今年１月の「北海道クローズアップ」で放送された戦争孤児の女性のその後にとても引き込まれた。北海道庁に公文書の公開を求めて自分の足跡の手がかりをつかむのだが、そんな方法があるのかと勉強になった。その後、実の母親が東京大空襲で亡くなっていたと分かり、納得できるところがあったのではないかと感じた。また、北海道で養女になる前に、母親とは別の女性が彼女を預かって２年間も育ててくれたという事実に驚いた。自分１人で生きていくだけでも大変な戦後の混乱期に、そんな人がいたのかと、とてもうれしく思った。連続テレビ小説「なつぞら」のようなことが本当にあったということで、人間はそんなに捨てたものではないと、とても前向きな気持ちにさせてくれた、すてきな特集だった。

○　８月２５日(日)のバリバラ　生放送「２．４時間テレビ　愛の不自由、」(Ｅテレ 前

0:00～2:24)を見た。民放のチャリティー番組の裏で「２．４時間」というタイトルから攻めていて、生放送で障害者の性の問題を取り上げていた。障害者を正しく理解する上でこれは絶対に避けて通れないし、これを分かったうえで障害者と接するのは、分からずに接する場合に比べると雲泥の差がある。公共放送にふさわしい内容だった。

○　９月５日(金)のクローズアップ現代＋「“表現の不自由展・その後”中止の裏で何が」を見た。この問題が起きてから放送までそれほど時間がたっておらず、短い取材期間だったと思うが、新聞やニュースでは分かりえない情報を分かりやすくまとめていた。何かに偏ることなく、主催者側、出展者、協賛する企業、そして行政と多方面に対する取材が行き届いていた。ＳＮＳで抗議の呼びかけをした人たちにも取材が行き着いており、その拡散の流れなどは新聞などでは分かりえない情報だったので、その点にも驚いた。今回の問題の概要がよく分かる一方で、ＳＮＳにおける今の日本の情報の流れについても勉強になった。最近の「クローズアップ現代＋」は、取り上げる内容が非常に充実していて、毎回とても楽しみにしている。

ＮＨＫ札幌拠点放送局
番組審議会事務局

２０１９年７月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

７月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、１７日(水)、ＮＨＫ札幌拠点放送局において、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、北海道クローズアップ「“遠すぎる”郷土～元国後島民の歳月～」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、８月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	山下　徹也	((株)グローバル経営センター　代表取締役専務)
副委員長	蛭田亜紗子	(小説家)
委　　員	今村　江穂	(NPO 法人子どもと文化のひろば ぷれいおん・とかち　理事長)
	嘉指　博行	(北海道新聞社論説委員)
	桐生　宇優	(北雄ラッキー株式会社　代表取締役社長)
	齋藤　拓也	(北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　准教授)
	成田　正夫	(ながぬま農業協同組合　代表理事組合長)
	船山　大介	(特定非営利活動法人　Ｎｏ Ｌｉｍｉｔｓ　理事長)

（主な発言）

＜北海道クローズアップ「“遠すぎる”郷土～元国後島民の歳月～」
(総合　７月１２日(金))について＞

○　元島民とその家族の思いを丁寧に追っていた。元島民である古林貞夫さんは、自身と父親の思いも重ね合わせていて、自分の息子にもその思いを理解してほしいと願っている。ただし一方で、それを受け入れてもらえないのではないかという葛藤が描かれていた。息子の克茂さんは、父親とは違う人生を歩みながらも、できる限り父親の思いを理解して寄り添おうとしているように見えた。すれ違っているようで、２人の思いはつながっている姿が番組を通じて描かれていて、非常に心を打たれた。イラストを描いてもらうため、古林さんが自分の体験を若い世代の、今春根室の高校を卒業した髙岩凜さんに語る姿からは、自身の根底にある、自分の体験したつらさを他の人に繰り返させてはいけない、という思いを大切にしていることが伝わってきた。元島民本人だけではなく、家族にも、若い世代にも焦点を当てたことで、この問題への向き合い方の違いが出ており、いろいろな人がそれぞれに理解

できる内容になっていたと思う。

○　元島民の人が１９歳の女性の力を借りて、国後島での生活や経験を伝えようとする、個人の新しい返還運動の取り組みが紹介されていて、とても興味深かった。イラストで協力する髙岩さんは、聞いたことを理解できていないと描けないような、とてもいい絵を描くので、彼女にも興味を持った。その中で、ソ連兵が子どもにキャンディーをあげているイラストはとても意外だった。ソ連兵については悪い話ばかりを聞かされていて陰湿なイメージだったが、それが変わり新たな発見だった。番組の構成で時間があちこち前後していたが、時系列に沿って素直に伝えたほうが、「今はどうなっているのか」が強く伝わり、分かりやすかったのではないか。

○　北方領土の問題は風化させてはいけない問題であり、大変意義のある番組だったと思う。古林さんの強い気持ち、息子さんとの会話の映像など、番組スタッフと家族がとても打ち解けたからこそ撮れたものだと感じた。ただ、これから先「元島民」の方がいなくなったときに、この問題をどう語り継いでいくのか、どう残していくのか。「こんなことをやるべき」という意見を言う人が出てきてもよかった。また私も、ソ連兵に関しては悪い話しか聞いておらず、子どもたちにキャンディーをあげているイラストには驚いた。

（ＮＨＫ側）

「風化」は一つのテーマだと思って制作した。髙岩さんは、高校生の頃に北方領土研究会の部員であり、美術部員でもあった。よく勉強されている方で、古林さんから聞いたいくつかの体験の中でも、ソ連兵について着目し、描くことにこだわりを見せていた。

○　元島民の７０年の思いがどう描かれるか、興味があった。昔は返還運動も「返せ！北方領土」と強い口調だったが、最近はだんだんと弱い口調になっている。道民に共通して諦めに近い思いがあるが、それを古林さんも感じているように見えた。自分がこれから何をするべきかとなったときに、若い世代である髙岩さんに話を聞いてもらい、イラストにしてもらうシーンはとてもよかった。しかし、一人だけの経験がすべてではないので、悲惨な現状について、いろいろな人々の意見を聞いてみたかった。元島民の希望やいま国後島に住む人々の状況など、政治の壁を取り払った部分を見せてもらえると、それがまた道民の新しい考え方につながっていくのではないかと思う。

○　古林さんの父、本人、息子、そして髙岩さんという４つの世代のそれぞれの思い

と葛藤が写し出され、考えさせられるところの多い番組だった。同じ北海道でありながら、西部と東部ではかなり意識の差があるということも、今回の番組を見て感じ、北方領土問題の現実を知る、よい機会になった。また、本当につらい過去があったにもかかわらず共存を望む古林さんの姿勢に心を打たれた。当事者世代と非当事者世代の意識のずれが、特に息子さんとの朝食シーンで象徴的に描かれていた。一つのシーンが長過ぎると感じた場面もあったが、葛藤に苦しんでいるところを伝えたかったという意図だったのかと思う。孫世代でもある髙岩さんに手記を託す古林さんは、本当によい笑顔で印象に残り、思いを後世に語り継ぎたいという姿勢には感銘を受けた。

○　領土問題という国家間で未解決の課題を、古林さんという１人の人間の生き様に投影することで、その苦悩に共感し、初めてそういう問題だったのかと気づかされた。戦後７４年という歳月がたってもなお、ふるさとに強い思いがあり、風化させたくないという思いが伝わってきた。若い世代と出会うことで、息子にもなかなか伝えられなかった思いが、今ようやくその一歩を歩み始めたのではないか。若い世代の髙岩さんが、古林さんの話を聞いてその思いをくみ取るように絵を描いておりよかった。「ロシア人と一緒でも暮らしていきたい」と語る古林さんだったが、歳月を経て心境も移り変わっているのだと思う。このような問題があることを忘れないためにも、番組を通して継続的に世論に伝えていく必要がある。考えさせられるいい番組だった。

（ＮＨＫ側）

北方領土の問題については、北海道の中にあっても、地域によって温度差がある。根室では高校にまで北方領土研究会が普通にある。この差を埋める一助として、継続的に伝えていきたい。

○　北方領土出身のお年寄りは他にもいるが、その中から古林さんに焦点を当てた理由は何かと、興味を持ちながら見た。島で生まれ育ち、家族を養っていたお父さんが津波で若くして亡くなっているという話もとても象徴的であり、息子の克茂さんが父親の思いや経験を詳しく聞いたことはなくても、きちんと肌身で感じているようで、親子三代に伝えられようとしている島の記憶がくっきりと浮かび上がる構造になっていたと思う。丁寧に気持ちを追ってはいるが、一方で北方領土問題には進展がないため、淡々とし過ぎるところがあった。例えば、８月に息子さんと墓参りに行く計画があったが、実際はどうだったのか。また、髙岩さんのイラストの完成も見たかった。そういった見せ場がしっかりあったほうが、印象に残る番組になったと思う。長期で取材しているので、もう少し待ってから番組を仕上げたほうが充

実したかもしれない。終盤の古林さんの現在のロシアの島民に対する言葉がとても胸に残り、解決策がないと思われたこの問題に、何か未来のようなものが少し見えた気がした。

（ＮＨＫ側）

古林さんは、寡黙であるけれどもこの問題に真摯（しんし）に向き合っていて、また息子や父親の思いをきちんと背負っている。この領土問題の歳月の長さを考えるにあたって、家族を通して描けると考えた。「淡々とし過ぎ」との指摘だが、領土問題は進展がなく、元島民の歳月や日々は、実際には淡々としている。その期待と失望を淡々とした中で描ければ意味があると考えた。また、髙岩さんは非常に真面目な方で、イラストを何度も描き直しやり直していて、まだ完成には至っていないということだ。

○　「領土問題は 100 年」と言われ、北方領土は身近な問題として存在していた。番組は、元島民に寄り添いながら進行して、元島民の期待と焦りと諦めなどを分かりやすく説明していた。寡黙な古林さんは、多くのことを自分の息子にも語っていなかったが、少しずつその思いを次の世代につなげていく様子が、的確に表現されていた。今後このような思いを抱く人々がいなくなった時に、領土問題に対する取り組み方を、私たちもそろそろ考えないといけないと強く思う。北方領土の位置づけ、返還された時の経済効果など、経済面だけの視点で作った「北海道クローズアップ」も見たいと思った。

＜放送番組一般について＞

○　６月２１日(金)の北海道中ひざくりげ「水の恵みが人をうるおす～美幌町～」を見た。町の水の恵みと、自然を切り開いてできていった風景の映像がふんだんに使われていて、そこで豊かに暮らしている人たちの様子を楽しく見ることができた。また、博物館の学芸員である町田善康さんの取り組みも紹介されており、地域の理解を得ながら生き物の大切さを伝える活動にも感心した。一方で、もともと自然が豊かで多く残っているように見えるところでも、暮らしの利便性を追求することで、魚のすみかを奪うというように、自然の営みを簡単に崩してしまうのだと感じた。普段の「ひざくりげ」では、取り上げられている人たち同士の交流はあまりないと思うが、今回は世代も活動も異なる人たち同士が一緒にお酒を飲んで語らうシーンがあり、とてもまとまりのよい作りだと感じた。旅人の小山凌アナウンサーも、年配の先輩に可愛がられている感じで、打ち解けた様子がとてもよかった。

○　とても立派な博物館と魅力的な学芸員さんがおり、子どもたちをふるさとの自然の中で育てることに力を入れている、とてもよい町だと伝わってきた。特に、学芸員である町田さんの、地域の人たちに自分の町の魅力や豊かさを再認識させ、一緒にやっていくという行動はとても魅力的だった。また、２人の男性のイワナを通して友情を育んできた話は、とてもよいエピソードだった。しかし、イワナを焼いて粉にして飲むと病気が治った、というエピソードが紹介されていて、見ている人が誤解しなければいいなと思った。

○　７月１３日(土)の知っとく北海道「今日はとことん！道北・宗谷エリア～稚内市・豊富町～」(総合 前10:25～11:15 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。リポーターが愛着を持ちながら地域を紹介するというスタイルも定着し、番組として安定感が出てきたように感じた。生放送の会場にいる地元の人に、写真パネルで市や町の名物などを紹介してもらうという形もあったが、地元の人々が番組に関わるよいアイデアだと思う。ＮＨＫ旭川からのお知らせとして、旭川局のキャスターが手書きのスケッチブックで番組紹介しているのもよかった。いろいろな情報があり、そこに行ってみたいと思わせてくれる番組だった。

○　豊富町の牛乳の素晴らしさを、視聴者にはっきりと分かりやすく伝えており、とてもよいと思った。また、温泉旅館の味付きのカラフルバターを紹介していたが、この商品を探してきた取材力に感心した。ＳＮＳで寄せられた意見の紹介など、インターネットとの融合の取り組みも行っているという点で、大変興味深く見た。

○　初期の頃よりも進行がスムーズになっていて、番組として形ができてきたと感じた。取り上げたものはどれも興味深く、特にサロベツ原野は、ぜひこの夏に行ってみたいと思った。リポーターの藤岡みなみさんの明るくてサービス精神旺盛な魅力がよく出ていてよかった。また、彼女の声だけの温泉リポートも新鮮だった。

○　７月１３日(土)のＷｉｌｄ　Ｈｏｋｋａｉｄｏ！「天売島」を見た。天売島にやってくる海鳥の生態が面白く、巣に仕込んだカメラでとらえた生き生きとした姿は見応えがあり、とても楽しく視聴した。

○　「ほっとニュース北海道」の中で「選挙に行こう！ひとくちメモ」というシリーズ企画を放送していた。分かりやすい内容で、若い世代でも見たら興味を覚えると思う。今後の選挙の際にも継続してやってほしい。

○　ニュースを中心に見た。火事や虐待のニュースを伝えていたが、その結果がどうだったかというのは分からなかった。火事の出火の原因は何だったのかなど、その時々の話にならないように、しっかり検証してもらいたい。また幼児虐待にしても、容疑者のその後がなかなか見えてこない。今後はそれを見せてほしい。

　また、「選挙ひとくちメモ」については、若い人々にも見てもらえるような工夫が必要ではないか。

○　毎日「おはよう北海道」の最後で「なつぞら」の５秒ＰＲ映像を放送しているが、とてもテンションが高い。「あさイチ」のドラマ受けとは違い、ドラマの始まる前なので、なくてもいいのではないか。

○　６月１６日(日)のダーウィンが来た！「北海道　リスｖｓ.カラス　樹上の攻防戦」を見た。帯広市内の公園が舞台で、市民になじみ深い憩いの公園である。そんな公園のすぐ横であのようなリスの子育てやカラスとの攻防が繰り広げられているというのは、本当に感動した。確かにリスはたくさんいるところではあるが、あんなにドラマチックに伝えてもらえて、地元では話題になった。あの公園はＡＲゲームの“聖地”にもなっているのだが、みな手元のモバイルから目を移して、木の上を見てほしいと強く思う番組だった。

○　７月８日(月)のあさイチ「ビックリ！生理の新常識ＳＰ　生理がラクに回数減！」を見た。ピルを治療目的で使うことが一般化し、治療薬として服用することに、私たちの母親世代と今の医療の常識とのギャップがあり、ついていけないところがあった。きちんと説明もされていたが、薬である以上は副作用もあり、リスクがないわけではないと思うので、どのような体の変化が起きるのか、また根本的な原因も今後の情報として教えてほしい。また、生活習慣や食のことなども絡めて、女性の体に関して若い子どもたちにも正しい知識を伝えていけるような報道を期待したい。

　また、「おはよう日本」でも治療としてピルを服用している女子高校生のＳＮＳの紹介があり、その内容にとても反響があったと聞いた。タイムリーな話題であり、いろんな世代の女性が興味深く見たのではないかと思う。

○　７月８日(月)の「あさイチ」を見た。最近の特集の中で、非常によかった。女性の生活に大きく関係することであるが、偏見や誤解されていることがまだまだ多く、たくさんの人が見ている朝の時間に取り上げるのは非常に意義があったと思う。女性ゲストの２人もとても関心が高く、熱意が感じられた。そして、低用量ピル以外にもいろいろな選択肢を提示していて、見ている側にも考えさせるように作られており、とてもよい番組だった。番組によって実際に救われた人がたくさんいると思うので、今

後も頑張ってほしい。

○　「ろうを生きる 難聴を生きる」をよく見ている。ろう者あるいは難聴者にスポットを当てた番組で、まさに公共放送だからできる番組だと思っている。いろいろな困難を抱えて生きる、さまざまな人生を取り上げていて、聴覚障害者にとっては人生に希望を見出せる内容でとてもよい。今後も内容を充実させながら、継続していってほしい。

字幕放送について、わが家ではＮＨＫか民放かに関わらず、ずっとオンの状態である。収録番組はほとんど、進行に合わせた字幕がついているが、生放送のニュースやスポーツ中継はどうしてもタイムラグが発生する。字幕が最後まで追いつかないまま終わってしまい、聴覚障害者にとってストレスが大きい。また、スポーツ中継では、見ると内容は大体分かるので、解説者の話や補足説明だけでも、字幕表示されればよいと思う。これは聴覚障害者に限らず、高齢者でテレビのボリュームを大きくしている方にも有効なことではないか。

（ＮＨＫ側）

生放送で字幕を送出する際は、テレビ放送の音声から自動音声認識技術を用いて字幕文字を作成し、間違っていないか人がチェックし、間違っていれば正しい文字に修正して出すという過程を経ている。そのため遅れが出るのが現状である。

今年２月から８月末まで、夕方６時台の地域番組を対象に、自動音声認識による字幕をそのままインターネットで配信する実験を、福島と静岡と熊本の３県で実施している。自動音声認識技術を使った字幕を広く活用しようと、検証している段階である。

（なお、欠席の委員より、文書で次の意見が寄せられた）

○　６月１８日(火)のプレミアムカフェ　ハイビジョンスペシャル「大空へ～アメリカ自作飛行機物語～」を見た。「プレミアムカフェ」はかつて放送した番組からリクエストや評判のよかったものを再放送しているので、厳選されており外れがほとんどない。今回の「大空へ」についても、画面から緊張感が伝わり、思わず力が入って見入ってしまった。空を飛ぶという単純な欲望のために、いかに多くの人がお金と時間をつぎ込んでいるのか、あこがれを持って見ることができた楽しい番組だった。

ＮＨＫ札幌拠点放送局
番組審議会事務局

２０１９年６月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

６月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、１９日（水）、ＮＨＫ札幌拠点放送局において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、若泉札幌局長と域内各局長からあいさつがあり、議事に入った。

続いて、北海道１５０年記念ドラマ「永遠のニシパ～北海道と名付けた男　松浦武四郎～」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、７月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告があり、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	丸藤　競	（函館市地域交流まちづくりセンター　センター長）
副委員長	井田芙美子	（(株)いただきますカンパニー　代表取締役）
委　　員	嘉指　博行	（北海道新聞社論説委員）
	桐生　宇優	（北雄ラッキー株式会社　代表取締役社長）
	齋藤　拓也	（北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　准教授）
	佐々木良榮	（デザイナー、（有）良栄・ＰＬＡＮ　代表取締役）
	成田　正夫	（ながぬま農業協同組合　代表理事組合長）
	蛭田　亜紗子	（小説家）
	村田　博	（(株)村田商店　代表取締役）
	柳谷　君予	（NPO 法人ﾜｰｸﾌｪｱ ｵﾎｰﾂｸ若者ｻﾎﾟｰﾄｽﾃｰｼｮﾝ総括ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ）
	山下　徹也	（(株)グローバル経営センター　代表取締役専務）

（主な発言）

＜北海道１５０年記念ドラマ

永遠のニシパ～北海道と名付けた男　松浦武四郎～

（総合　６月７日（金）後 7:30～8:51（北海道ﾌﾞﾛｯｸ）について＞

○　北海道の風景、歩いている野山のシーンが、われわれがふだん歩いていて見る野山のシーンと全く一緒なので、雰囲気はものすごくよく伝わってきた。配役に関しても、語りに中島みゆきさんを入れたり、小日向文世さんを起用したり、北海道にゆかりのある方を入れており、北海道のドラマとしてはとてもよかった。ただ、アイヌの迫害と恋愛ドラマ、松浦武四郎の活躍など、何でも盛り込もうとし過ぎたのではないかという印象がある。何かに焦点を合わせてドラマを描いていったほうが、見ているほうは楽しかったのではないか。脚本が大人の恋愛ドラマに定評のある大石静さんなので、せっかくなら武四郎の恋愛にフォーカスしていたら、一般の方がドラマとしても

っと楽しく見られたのではないか。また、なぜ「永遠のニシパ」という題名になったのか。「ニシパ」というのは恋人という意味かと思ったら、全然違った。その言葉に「永遠」とつけているが、そのつながりがよく分からなかった。

○　幕末から明治にかけて有名な歴史上の人物がたくさんいる中で、武四郎という人物を描き、派手なアクションはないが、静かに印象に残るドラマだと感じた。北海道にゆかりのある俳優の起用や、中島さんの落ち着いた語りも非常に印象的だった。主演の松本潤さんも、時代劇は初めてとのことだが、新鮮ないい演技だった。こうしたことで関心を持って見る人が多かったのではないか。また、北海道の歴史や幕末の時代などの説明的な要素をかなり排除してすっきり見せており、しかも武四郎が北海道に来る前に何をしていたかという前提知識がない人も入っていける番組になっていてよかった。アイヌでありながら日本語が話せる架空の人物リセに日本人とアイヌの間にあった悲惨な出来事を語らせていた点は、なるほどと思う作りだった。武四郎の成功物語というよりは、苦悩や挫折など、晩年まで歴史にほんろうされた苦悩の部分を描いていたことも、とても印象に残った。また、このドラマの放送日時の前からとても短い「“私たちの武四郎”スペシャルムービー」も放送されていたが、あれはどのようなコンセプトで行ったのか。

（ＮＨＫ側）

今回の放送にあたって、視聴者から、自分たちの身近にある、武四郎が見たであろう北海道の風景を撮って投稿してもらい、それを映像作家が編集し、「“私たちの武四郎”スペシャルムービー」を制作した。「武四郎が見た北海道の風景」というコンセプトだが、現代の映像なので武四郎が生きた時代の風景にそのものではなく、映像作家が投稿された画像を加工して幻想的な映像を作り上げた。若い人が映像をＳＮＳで共有しやすいような企画として行い、参加できるようにするための一つの手法として今回チャレンジした。

○　期待して見たが、期待外れな部分が多かった。まず、武四郎が北海道にどんな強い思いで来たのかが見えなかったし、松前藩から迫害を受けていたアイヌが、どうして武四郎とはすぐに仲良くなれたのかも伝わってこなかった。また、ウテルクが熊に片腕をもがれてしまう場面も少し盛り過ぎではないか、あの時代で片腕がなくなるのは、命にかかわると思うので、そこがフィクション的な感じがした。武四郎だけをクローズアップするのではなく、歴史的背景などをもう少し見せてもらえると、松前藩とアイヌの関わりが分かり、武四郎が刺客に狙われた理由も伝わったのでないか。厳しい寒さの中で指が凍傷になり、黒くなったという描写はあったが、その過酷さの中、一生懸命歩いて北海道の礎を築いたということは、映像からは伝わってこなかった。

○　エゾシカなど動物がいる自然の風景で始まる導入に引き込まれ、北海道の原野を歩いている場面もとても美しく、印象に残った。イラストがところどころに出てきたが、武四郎が本当に描いたものを使っているのか、それともそれらしく描き起こしたものなのか、気になった。大政奉還などが行われた歴史的な流れは、くどくなるのを避けてさらっと説明しており、とてもうまい構成だと思った。時間経過が分かりづらいところがあり、メイクを変化させていたのかもしれないが、変化がほとんどなく、イチニカという少年が大きくなったのを見て、はじめて時間が経過したと分かった。テロップで「明治〇〇年」と入れるなど、何年経過したのか分かるほうがよかった。ドラマ後の短い関連番組にドラマにも出ていた市助という少年が出てきたが、実際に武四郎の残した記録の中に名前が出てくるということが分かり、架空の人物だと思って見ていたので、どこまでが史実でどこまでがフィクションなのか気になった。

（ＮＨＫ側）

ドラマの中でニシパは「大切な人」という言い方をしている。一般的には男性に対する尊称で、「先生」という意味合いだ。また、今でもアイヌの方々は、尊敬を込めて武四郎のことを「タケシロウニシパ」と呼んでいる。リセにしてみれば「私の一番大切な人」であり、武四郎が今でもニシパと呼ばれているということを含めて、「永遠のニシパ」というタイトルをつけた。ドラマの中に出てくるイラストについては、エンディングで使用したのもの以外はドラマのために武四郎の画風に似せて作ったものだ。また、基本的に歴史的な部分は史実に基づいて描いており、アイヌの人たちの部分は、基本的にはフィクションだ。イチニカ＝市助やウテルクなどは武四郎が描いた「近世蝦夷人物誌」を元にしているが、リセだけは全くのオリジナルキャラクターである。リセのような象徴を作ることで、すっとドラマに入っていけるだろうという設計だった。

○　骨太で、すばらしいドラマだと思った。ニシパという言葉の語感がとてもよかった。アイヌ語のシーンに字幕スーパーが出ていて、アイヌ語がいかに日本語と異なっているかがわかった。リセ役の深田恭子さんの演技はすばらしく、ものすごく不幸な人生を彼女は生き抜いていたことが、ちゃんと表現されていた。ただ、日本語があまりにも流ちょうなことが引っかかった。また、リセの子どものイチニカを江戸に連れていき、またエゾに戻したという展開になっているが、彼がエゾでどういう生き方をしていたのか。史実が分かるなら、教えてほしい。中島さんのナレーションも存在感があり、非常によくできた、いいドラマだった。

○　タイトルのみで何の予備知識もなく見たが、武四郎に強い関心を持つことができた。実際にアイヌ語がドラマの中で使われて、字幕が出てくる場面があったが、今までのテレビドラマではアイヌ語が本格的に使われることはなかったのではないか。アイヌ語を、アイヌ語講座などではなくて、テレビで聞くのは初めてだった。こうしてテレビドラマで見られるようになったことに、時代が変わった、としみじみ思った。市助は実際に名前があったということが最後に出てきたので、その後どうなったのかが気になった。

（ＮＨＫ側）

市助は「近世蝦夷人物誌」に出ているが、そこに書いてあるのは、武四郎が市助を江戸まで連れていったことまでである。そこからはドラマとしての表現で、本当に一緒に住んでいたかどうかは分からない。ただし、武四郎は江戸に戻った後、二度と北海道の地を踏まなかったのは確かなので、市助のような若い世代に希望を託したという展開のドラマにした。

○　せっかく松本さんを主役として起用しているのであれば、もっとフィクションに振れてもよかったのではないか。私の中で武四郎は、いろいろな地名をつけていった人ぐらいのイメージしかなかったが、列強の植民地にされないように「北海道をちゃんと統治する」という思いを持っていたということを知ることができ、勉強になった。豪華な俳優をたくさん起用したのはいいが、あまりにも短い登場ですごくがっかりした。制作費やスケジュールの都合などもあるだろうが、前編・後編や３部作ぐらいにして、もっと掘り下げてもらえれば、さらに深く理解できたのではないか。北海道という名前が、実際にこのドラマのようなストーリーで決まったのだったとしたら、とてもすてきなことだと思った。北海道各地の地名は、アイヌの方々が呼んでいたことをそのまま漢字に当てはめたものがとても多く、さまざまなストーリーが北海道には散らばっているのではないかと、ロマンを感じる番組だった。

○　期待していた番組で、大変楽しく視聴した。冒頭の北海道の映像はとてもきれいであり、かつストーリーのテンポがよくて、とても短く感じた。アイヌの踊りの映像やアイヌ語も使われており、こういった歴史があったということが全国放送で伝わることはとても意味のあることだと思う。激変する時代背景の中での複雑な話を、絵や地図などを見せることでとても分かりやすくまとめており、見やすいドラマだった。ただ、ドラマ内では時間経過がかなりあったが、武四郎の見た目が年を取っているようには見えなくて分かりづらかったように思う。しかし、今回のドラマで武四郎が北海道にとってどれほど大事な存在だったということを改めて実感することができた。これから全国に放送され、アイヌのことを知らない方がどのように思うのか非常に興味

がある。「北海道から発信する」ような思いがあり、たくさんの方に視聴してもらいたい。

○　どれだけアイヌの人たちにひどいことをしてきたのかを、映像で突きつけられ、訴えかける力があったドラマだった。ドキュメンタリーではなく、アイヌの人たちの苦しい歴史を描いたドラマはあまりなかったような気がする。この作品を通じて北海道外の人たちにもアイヌの人たちのことを考えてもらうよいきっかけになったのではないか。松本さんのファンなどの若い人たちにも、「そんなことがあったんだ」と何となくでも分かってもらえたとしたら、とても意義のあるドラマだと思う。ただ、アイヌの人たちを厳しい状況に追いやってきた歴史がきちんと分かる一方で、無理やり勉強させられているような印象もあった。

○　映像として当時のアイヌの生活の様子を見たり、生きた会話としてのアイヌ語を聞いたりしたのは初めての経験だった。ドラマという形でアイヌを扱うということは、本当に歴史的なことをしたと思う。５月３１日(金)に放送された「まもなく放送！ドラマ“永遠のニシパ”」(後 8:00～8:28 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)で、メイキングの様子を見て、衣装も本格的な指導のもとに作られていたり、出演者が一生懸命アイヌ語を練習されていたりと、文化的なこともきちんと配慮してドラマを作られたことが伝わり、ドラマ本編をより楽しむことができた。映像に関しても、当時の北海道がいかに険しく厳しい自然の中にあり、そこを武四郎が歩き切ったということの苦労が、壮大なすばらしい映像の中で表現されていたと思う。全体としてとてもすばらしかっただけに、リセとの恋愛模様と、熊に襲われるシーンが唐突な感じがして、残念だった。

○　冒頭のシーンでは、北海道外に住んでいる人にも北海道の雰囲気を伝えることができてよかった。武四郎といえば６０代半ばの写真のイメージしかなく、実際に道内を歩いたのが「何歳のとき」という説明があればよかった。副題が「北海道と名付けた男」だが、北海道と名付けたところのシーンは意外とあっさりしていて、あっという間に番組が終わってしまった印象だ。一方で、アイヌのシーンは非常に多く、アイヌというのはどういうものか、北海道以外の地域ではあまり知らない人もいると思うので、そのような人たちに知ってもらえるよい機会になると思う。私も「まもなく放送！ドラマ“永遠のニシパ”」も見たが、ウテルク役の木村彰吾さんの目力が強くてすごくよかった。セリフもあまり多くなく、ただ黙々と先頭を切って歩いているだけだったが、とても存在感があった。

＜放送番組一般について＞

○　５月１７日(金)の北海道クローズアップ「あなたの町の水道が危ない！？」を見た。番組冒頭で道内各地の水道料金が示され、札幌の料金が東京や大阪と比べて高い理由や、各地のさまざまな取り組みが紹介されていて、取材にとても時間をかけたのではないかと感じた。ゲストである水ジャーナリストの橋本淳司さんの説明も分かりやすくて説得力があった。北海道のことから出発して、地方の事例も紹介し、日本全体の問題につながるような視点から番組が作られていて、とてもいい構成だったと思う。野村優夫アナウンサーと浅野里香アナウンサーの２人も息が合っていて、とてもよい回だった。

○　水道管も浄水場も住民にとって身近なものなのに、普段は実態が見えていないことがこのような状況になっている原因だ。断水となると、みんな困り、慌てて怒りの声を上げる。水はあって当たり前のものとなっており、こういった地味だが重要な話題を番組で掘り起こし、見せ方を工夫して今後も伝えてほしい。

○　水道料金の値上げだけではなく、水道水がいつまで飲めるのか分からないという問題の深刻さを、とても分かりやすく提起していた。そして、それに対して有効と考えられる解決策まで提示されているところがとてもすばらしいと感じた。解決策として紹介された福島の簡易ろ過施設は、地元の人が管理しており、住み慣れ親しんだ地域でおいしい水を飲みながら生活していけるという希望が見えた。

○　課題の抽出、構成、最後の解決策にも希望が見られるという点で、「北海道クローズアップ」の完成形のような番組だった。

○　５月２４日(金)の北海道クローズアップ「命とふるさとを守りたい～地域医療崩壊の危機～」を見た。どうしたら医療をよくできるのか、住民の側が医師とどのように接するのかなど、いろいろな視点から紹介しており、よい番組だった。ただ、総合診療医を育成することが大事だという話で、２０年かけて 672 人の総合診療医が育成されたが、日本の人口規模では 672 人という数字がどのような意味を持つのか。北海道に総合診療医が何人くらいいて、これからの課題なのか、それとも数としては十分いて、どう生かすかが課題だという話なのか伝わってこなかった。そういうところは、もう少し詳しく教えてほしかった。

○　総合診療医が 672 人いても、身近にいるとは言いがたい。医療制度改革といいつつも、五千円という高額な特別医療費を払ってでも大病院に行くという状況はあま

り変わっていないように感じる。それだけ、難しい問題ではあるが、国の医療政策としてどんな取り組みがされているのかは気になった。

○　稚内の医療現場の実態が取り上げられており、非常に分かりやすい構成だった。調査結果を踏まえて、市の地方創生課の職員が話をしていたが、市はまだ何もしていないのか、今後どのような取り組みをしようとしているのかを知りたかった。そうした状況の中で、本当に危機感を持って応援メッセージを書くという市民の取り組みに、感心すると同時に、悲痛さを感じた。医師も患者も疲弊していく悪循環になっていることを、ひしひしと感じた。「不要な受診が問題」と言っていたが、実際、総合病院にはどれぐらいの割合でそのような人がいるのか知りたかった。また、総合診療医の存在を初めて知ったが、672 人というのは多いのか少ないのか分からなかった。国の取り組みとしては、総合診療医という特別な資格を持たせて育成していくという話であり、更別村での試験的な取り組みをさらに広げるにはどうしたらいいのか、深刻な医療不足の地域で、取り組むにはどうしたらいいのかといった点も知りたかった。この問題は引き続き取材してもらいたい。

○　総合診療医については 672 人というのは少ないという感覚があったので、その辺については今後取り上げ方を検討していただきたい。稚内の事例で「今、自分にできること」という視点を投げかけたことはよかった。また、ゲストの永森克志医師の「専門医をみんなで育てる必要がある」という発言もよかった。地域に赴任したらいろいろな症状を診なければいけないが、医師は万能ではないという現状を、私たちも理解しなければいけないということを提案してくれた。キャスターの問いかけが、押しが強いように感じられ、ゲストがことばに詰まってしまう場面があった。もう少し柔らかい態度で質問すれば、会話がしやすいのではないか。

（ＮＨＫ側）

地域医療については、稚内の厳しい医師不足の現状を取り上げなければならないと思い、取材を進めた。総合診療医が 672 人という人数が、一体どのような意味を持っていて、全国の地域医療が抱える問題を解決する糸口がつかめるのか、そこにどのような可能性があるのかという指摘を頂いたので、引き続き取材を続けたい。また、番組キャスターは、現場での取材経験が豊富で、その長所を今後の番組の中でうまく生かしてもらいたいと考えている。ゲストの方からのことばの引き出し方についても工夫していきたい。

○　５月３１日(金)の北海道中ひざくりげ「十勝の馬は大きく強く～帯広　厩舎(きゅ

うしゃ)村」を見た。厩舎村というかなり独特なコミュニティーでの生活をかいま見ることができて、とても興味深かった。食堂や共同浴場などの交流する場もある建物は、昔ながらの風情があり、その中で子どもたちが育つという暮らしぶりは、今の時代にはなかなかないので、もっと見たいと思った。今回取り上げた二人は、ここで生まれ育った騎手を目指す若い厩務員と、自分で厩舎を運営しているシングルマザーの女性調教師だったが、どちらもばんえい競馬の未来を感じさせる人選でとてもよかった。

○　６月１４日(金)の北海道クローズアップ「笑顔を灯す人形を作る」を見た。普通の人が知らないことを誰もが理解できるように丁寧にきちんと取り上げており、広く伝えることができるのはＮＨＫの力だと感じた。展示会来場者へのインタビューも自然で上手だった。その人たちが心から思っていることを、きちんとインタビューして映像にしている。また、二人で全国を回って、自分たちだけで展示会をやっている姿に夫婦のきずなを感じ感動した。これは多くの人に知ってもらいたいと思える、そういう題材を取り上げたことを、高く評価したい。

○　温かいすてきな番組に仕上がっている。宮竹眞澄さんが作る素朴で優しくてほっとするような人形と、その人形に心を揺さぶられて立ち上がってきた人々の話は、じんわりと温かいものが伝わった。ただ、もう少し人形を見たいと思った瞬間に、場面が切り替わってしまったところが何度もあり残念だった。美術番組のようにじっくりと作品に触れることはないのかもしれないが、人形の魅力もすばらしいので、もっと長く人形を見たかった。番組終盤で、金沢市の女性に会いに行ったが、長々と尺を取ってまで取り上げる話ではないと感じた。とても印象的な方々が出てきた後なので、ラストとしては弱いと感じた。

○　本人の容姿や優しい声は、人形そのものの雰囲気と同じで、作る人と作品は似るのだなと感じた。昭和の明るい時代の日本を切り取ったような表情は、見る人の心の琴線にも触れるのではないか。人形の笑顔がいろいろな人を勇気づけ、癒やしているということが２５分の番組でまとまっていて、とてもよかった。また、人形の後ろに写真がたくさん貼ってあったが、人の目とカメラを通して写す写真は、また違う個性が出ていて、写真にもとても感動した。

○　冒頭の「涙が出るほどだ」という、作品を見た方の言葉で、どんな人がその作品を作っているのか興味を抱かせるという手法に、私自身も興味がわいた。作品を一つ一つ丁寧に作っていることが、視聴者にも伝わったと思う。交通事故で家族を亡くした女性を勇気づけるエピソードには心を打たれた。工藤恵里奈キャスターのナレーショ

ンもよく、題材にぴったりだった。

○　５月２５日(土)の北海道ＬＯＶＥテレビ　巨樹は語る「雪原に立つ 北海道・ハルニレ」(総合 前 10:51～11:16　北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。ハルニレ役の樹木希林さんと、その木を訪ねてきた緒川たまきさんとの会話で番組が進んでいくという構想に引き込まれた。取り上げている歴史もエピソードもとてもいい。内容もよかったが、何よりいい作品を作ろうという気持ち、志が強く伝わってきた。制作からかなり年月がたっていると思うが、初回放送の日時などを知りたいと思った。

○　６月１５日(土)の北海道ＬＯＶＥテレビ　六角精児の呑(の)み鉄本線・日本旅「夏・根室本線(花咲線)を呑(の)む！」(総合 前 10:25～11:25 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。釧路から根室まで行く様子を非常に楽しく見た。ただ、もう少し六角さんと地域や街の人との絡みがあれば、もっと楽しく見られたと思う。テーマがお酒なのか鉄道なのか、あるいは出会いなのかがぼやけていると感じた。しかし、駅で降りたときの情景や、飲食店の方たちが一生懸命頑張っていいものを作り、お客さんにサービスしようとしている姿は伝わった。

○　６月１５日(土)のＥＴＶ特集「希望の大地～北海道 厚真町 ふたりの開拓物語～」を見た。去年１１月の「北海道クローズアップ」で取り上げられた、北海道地震の被災地、厚真町で再起する７０代の夫婦を、その後も含めて詳しく伝えていた。奥さんの松平信子さんの折れない心、明るさが、悲惨な時の救いになるのだと思った。ご夫婦の魅力が前よりも際立って伝わってきただけに、補償をもらうために米作りを投げ出すことを迫るような国の方針の非情さが、とても気になった。前回よりも説明は詳しかったが、例えば自分が食べる分だけ取ったとしても補償が全くもらえなくなるのかどうかがよく分からなかった。

○　以前の放送は地震の後の１１月末で、その後９か月間も取材が続けられて、番組も深みが増していた。こういう形で取材を続けていくのはＮＨＫならではの大切なことだ。俳優の音尾琢真さんによるナレーションも抑えた感じの優しさのある語りでとてもよかった。ご夫妻の前向きな姿勢や、出てくる一つ一つの言葉が印象的で、本当に感動的な場面がたくさんあった。長期に取材して信頼感が得られているから、自然に出てくることばなのだと思う。今後も、このような勇気の出る内容の番組をどんどん作ってもらいたい。

○　６月１６日(日)のダーウィンが来た！「北海道　リスｖｓ.カラス　樹上の攻防戦」を見た。リスがあんなに人の近くにいるのだということが印象的で、北海道に来れば

ああいうところもある、ということも伝わると感じた。研究で個体識別をしていると思うが、メスの子育てのことばかりで、オスは何をしているのか知りたいと思った。また、カラスが子どものリスをくわえていくシーンが衝撃的だった。逆に母リスが命懸けでカラスに向かっていく姿には野生動物としてのたくましさを感じた。

○　ダーウィンが来た！「リスｖｓ．カラス」を見た。非常におもしろく、まさかリスがカラスに向かっていくとは思わなかった。こんなにおもしろい番組が北海道で作られていることにも感動した。

○　６月２日(日)のＮＨＫスペシャル「彼女は安楽死を選んだ」を見た。１人の女性が安楽死を選び、点滴のスイッチを入れて亡くなる瞬間までを映すことに衝撃を受けた。同時にそれを放送するＮＨＫの取材力の高さを感じた。

ＮＨＫ札幌拠点放送局
番組審議会事務局

２０１９年５月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

５月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、１５日(水)、ＮＨＫ札幌放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「２０１８年度北海道地方向け放送番組の種別ごとの放送時間」について、報告があった。

続いて、北海道クローズアップ「僕らが北極を歩くわけ～旅立ち編～」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、６月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告があり、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	丸藤　競	（函館市地域交流まちづくりセンター　センター長）
副委員長	井田芙美子	（(株)いただきますカンパニー　代表取締役）
委　　員	嘉指　博行	（北海道新聞社論説委員）
	齋藤　拓也	（北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　准教授）
	佐々木良榮	（デザイナー、（有）良栄・ＰＬＡＮ　代表取締役）
	成田　正夫	（ながぬま農業協同組合　代表理事組合長）
	蛭田　亜紗子	（小説家）
	村田　博	（(株)村田商店　代表取締役）
	山下　徹也	（(株)グローバル経営センター　代表取締役専務）

（主な発言）

＜北海道クローズアップ「僕らが北極を歩くわけ～旅立ち編～」
（総合　４月１９日(金)）について＞

○　今までの「北海道クローズアップ」ではあまり見たことのないテーマで、新鮮に感じた。自分が体験して転機を得たきっかけの舞台を若い人たちに用意しようという鷹栖町の冒険家・荻田泰永さんの思いが、非常に印象的で強い思いが感じられた。なぜ行くのかというよりは、行って何がよかったのかを、７月の続編では見たいと思う。参加者は北海道に限らずいろんなところから来ているが、道内出身やいま北海道に住んでいる若者をもう少し掘り下げてほしい。出発した時に桜が咲いていたが、北海道との季節感のずれを感じたので、そういうところの工夫がほしかった。

○　荻田さんがなぜ若者を連れていこうと思ったのか、よく分からなかった。「自分が行ってよかった」や「自分に連れて行く力があるから」とは話されていたが、もっと

深く聞きたかった。８０万円もかけて１か月で 600 キロを走破するところまでいかないと、自分の生き方を変えられないのだろうか。そこで自分の人生の道しるべになるものを見つけるのは美談としては非常によく分かるが、そこまで至るには違う側面があるのではないか。次回は７月だが、若者たちが北極の旅を終えてどんなことを思ったのかを伝えてもらえるよう期待したい。

（ＮＨＫ側）

荻田さんが若者たちを連れていく思いをもっとインタビューで聞きたかったが、もともと荻田さんは語るより行動で示す方なので、このプロジェクトを実行するための責任やリスクを描けば彼の決意は伝わると考え、あえてナレーションで強調するといったこともしなかった。

○　荻田さんが今回の冒険を企画した理由にあまり気負った感じがなく、好感が持てた。参加者３人の、今まで生きてきた背景が短い時間の映像で分かりやすく紹介され、荻田さんによる参加者の性格分析もあり、それぞれの特徴がうまくまとめられていた。今回の男性のナレーションがとても柔らかい感じで、とても聞きやすかった。また、ディレクターの参加者への質問のしかたも自然で、その人物像を映し出した感じがした。参加者１２人全員の紹介があれば、７月の続編への期待感が少し違ったのではないか。今回番組のラストが星野道夫さんの言葉「大切なことは、出発することだった。」で終わるのも、今までの「北海道クローズアップ」とは異なり、洗練されて格好よくまとまっていた。それがなおさら７月の放送に期待を持たせてくれた。

○　企画のすばらしさに引きつけられながら見た。番組を見ていた人の中には一歩を踏み出すかどうか迷っている人たちもいたと思うが、きっといい刺激になったのではないか。取り上げられていた参加者も興味深かった。荻田さんの参加者に対するコメントからは、荻田さんの魅力がよく伝わってきたし、優しく温かく見守っている感じも受けた。参加費も８０万円と紹介され、それによってそれぞれの熱意や意気込みがとてもよく分かった。参加者それぞれが北極に行ってどんなふうに感じるのか、どんなふうに変わるのか、７月の続編をとても楽しみにしている。

○　とてもおもしろくて、３０分があっという間に過ぎた。参加者への分析コメントだけでも、荻田さんの人柄や今回の企画への思いが十分に伝わってきた。しかし、今回のタイトルに沿って、もっと参加者に寄ってもよかったのではないか。クローズアップされていた参加者３人の動機がすごくおもしろかったので、そこを中心に始まってもよかったと思う。合宿の場から番組が始まったが、３人から物語が始まるほうが密度も高くなったと思う。３人とも今の時代の若者像で、それぞれが北極へ行ってどう

変わるのか、その変化が気になる。７月の続編をとても楽しみにしている。

○　参加者の中の３人を現代の若者というふうに象徴的に取り上げて、ドラマ作りをされた編集であると感じた。８０万円を出して参加した時点で一歩どころか二歩も三歩も踏み出していると思うが、踏み出したその人たちが北極に行き、どれぐらい変わって帰ってきたのかを、７月の続編では見たい。ナレーションの方は初めて名前を聞いた方だったが、とてもスムーズに耳に入ってくるナレーションで、大変よかった。

（ＮＨＫ側）

ナレーションは札幌在住の俳優小林エレキさんで、過去にも何度か読んでいただいた。今後も北海道の地元の俳優や人材を起用して、いい作品を作っていきたい。

○　かつて荻田さんは大場満郎さんと一緒に北極を歩いたことで、いろんな道が開けた。それを今度は若者に体験してもらいたいと今回の企画をした趣旨はよく分かった。恵庭で数日間の事前キャンプをしただけで、本当に１か月で 600 キロも歩けるのか不安に思ったし、参加者の中で心配になる人もいた。また、北極では補給基地が１か所あると言っていたが、そこで脱落する人が果たして何人出るのかも気になる。今の時代、スマホがあって当たり前の若い人たちが、体一つ、着る物と道具と知恵しかないという中で、どんなドラマが繰り広げられるのか。７月の続編では、見せ方の工夫も必要だし、旅立ち編とうまくつながって、この人たちはこういうふうに成長していくのだというところを見せてほしい。また、どのようにピンチをチャンスにするのかといったところも見てみたい。

○　募集方法も公募せず、自分で情報をキャッチして来た人を連れていったというところが、荻田さんの「行動に示せ」という考え方をよく表している。なぜ参加したのかも分からないのも若者らしさを表していて、大人たちにとってはどこか物足りなさがあるけれども、若い人たちが見ると、応援ソングのようになって勇気をもらったのではないか。今回の放送をきっかけにこの冒険のことを知った方が、この冒険のホームページを見て冒険を一緒に楽しめたという意味では、放送のタイミングとしてもよかったと思う。参加について「費用は８０万円ほど」というナレーションだったが、「若者が自分で８０万円を出してでも参加した」という表現のほうが、見ている側としては分かりやすかったのではないか。到着してどういう思いだったのか、７月の放送を楽しみにしたいという前向きな気持ちで終わり、ぜひ全国放送していただけるよう期待している。

○　「北極を歩く」なんて、訓練で鍛えた人、さまざまな経験をしている人だけが行けるものだと思っていたが、全体的にあんな軽い感じで行けてしまうのかと感じた。しかし、そこが今の若い人の感覚を表しているようで、逆によかった。ただし、何日間どんなトレーニングをどれぐらいしたのかがもうちょっと分かると、見ているほうは少し安心したと思う。７月の続編と今回放送されたものを並べて見ることで、参加者がどういうふうに変化しているのか、あるいは変化していないのか、そういうところを非常に楽しみにしている。

（ＮＨＫ側）

今回の北極の旅のルートは北極海の沖のほうではなく、陸に近い氷が安定しているところに設定している。途中の補給場所は１か所だが、それぞれのポイントで１日ごとに日本と交信して、何かあったら半日ぐらいでスノーモービルやセスナなどのレスキューが来られるところである。そのため、基本的に健康な男女であれば行ける場所であり、何かあったときにはバックアップできるということを確認したうえで、わたしたちも番組化した。恵庭のキャンプは、基本的には道具を丁寧に扱って正確に使えるようにするということが、極地では生き死にかかわるらしく、それを徹底的にやっていた。参加費の８０万円は、本人の交通費と宿泊費ぐらいで消え、装備や途中の燃料や食料は、すべて荻田さんがスポンサーを集めて調達していた。若者にとって８０万円というのはすごい金額ではあるが、荻田さんが自らスポンサーを集めて大半はそのお金でまかなってプロジェクトを成功させたという点を伝えるため、「８０万円ほど」という表現になった。

＜放送番組一般について＞

○　４月２０日(土)の北海道ＬＯＶＥテレビ　フロム・ザ・スカイ 空から見た日本「北海道の旅」(総合 前10:25～11:15 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。「フロム・ザ・スカイ」というタイトルだが、上空から見たときの北海道各地の様子や美しさだけではなくて、時々降り立って、各地の自然や文化、人の生活、そしてどんな仕事があるのかなどが分かる内容だった。北海道ならではの自分の仕事や活動を語る様子から愛着やこだわりが感じられて、魅力的な番組だった。この番組を見ると、４Ｋや８Ｋで制作した映像にはすごく引きつける力があると思った。

○　５月４日(土)の北海道ＬＯＶＥテレビ　ハイビジョン特集「北海道　豆と開拓者たちの物語」(総合 前10:15～11:45 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。ＮＨＫの番組ではこれまでも、北海道には豆の種類がたくさんあるということを伝えてきていたが、１時間半と

いう長い時間の中で、開拓の歴史や開拓者の暮らしを道内に限らず日本各地にまで求めていて、道外とのつながりを感じるおもしろい番組だった。十勝の農家の開拓２世の高齢者、自分の家族とか親の出身地の食文化への思い、われわれの世代の調理のしかた、ゆっくりとした時間の流れ、地べたに座って農作業をするような場面が丁寧に映像にされていて、派手さはないが、開拓者の生活史が伝わる、深く印象に残る番組だった。

○　2011 年の番組で、とても地味ではあるのだが、遠軽町瀬戸瀬で自給自足に近い暮らしをしているご夫婦を中心に、土に根ざした昔ながらの生活に、明治の開拓民の暮らしや 100 年間の人々の営みが重なって見えてくる、とても奥行きのある番組だった。原種に近い在来種の豆というモチーフ自体もすごく象徴的で、十勝の暮らしの息遣いが聞こえてくる内容だった。１時間半という長い時間、ゆったりとした感じをうまく生かした番組だと思う。

○　５月１１日(土)の北海道ＬＯＶＥテレビ　日曜美術館・選「“半身の馬”大地の画家・神田日勝」(総合 前 10:25～11:11 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。馬の絵だけでなく、風景画や知り合いの家など、これまで知らなかった神田日勝の側面も紹介しており、勉強になった。十勝の開拓の生活の一面や感性まで想像させてくれる構成になっていて、わたしが持っていた神田日勝のイメージを根底から変えてくれた番組だった。

○　再放送であるが、作品と人生のどちらもじっくりと掘り下げており、とても見ごたえのある番組だった。馬が出てこないちょっと意外な感じの作品から、開拓民としての厳しい暮らし、農民としての矜持や誇りみたいなものがにじんでいて、心に響いた。「北海道ＬＯＶＥテレビ」は“十勝特集”だったが、それぞれ別の番組でありながら、いくつか視聴していると、土に根ざして生きる十勝の暮らしというものがすごく立体的に見えてくるような作りになっている。こういうエリアごとの特集というのは、とてもいい取り組みだと思う。

○　わたしも５月４日(土)の北海道ＬＯＶＥテレビ「北海道　豆と開拓者たちの物語」と５月１１日(土)の日曜美術館・選「“半身の馬”大地の画家・神田日勝」を見た。どちらもすばらしく、時がたっても色あせない、いい番組だった。各エリアを月単位で取り上げていくことによって、今まで見なかった人が見るきっかけになる。６月は“道東特集”ということで、道東のことを勉強する機会にしたい。「北海道ＬＯＶＥテレビ」での再放送は価値のあるものだと、改めて思った。

○　「北海道ＬＯＶＥテレビ」で紹介される番組は、再放送になるぐらいだから、もと

もと一つ一つの番組のクオリティーが高く、どれを見てもためになるのでよい。

○　「ひるまえナマら！北海道」をよく見ている。「チェック！そらもよう」というコーナーで週間天気予報になると、いきなり手描きのものになる。あれは温かさを出すための演出なのかどうかわからないが見づらい。手描きにしなければいけないねらいがあるのか。「Ｉ　ＬＯＶＥ　ＪＩＭＯＴＯ北海道」のコーナーは、それぞれの地域の旬の食べ物や場所、そしてどういうことをやっているかということが、短い中でも伝わりやすく、情報もたくさん入ってきて、とてもよい。しかし、リポーターと地元の方とのやり取りに違和感がある。見たらわかりきっていることでも「これは何ですか」「何をしているんですか」とお決まりのパターンでやっている。もう少し違うやり方、表現があるのではないか。

○　５月１３日(月)「ひるまえナマら！北海道」を見た。「くらしナビ」のコーナーで、北海道での安全運転のポイントを伝えていた。運転手を安心させるひと言や、動物よけ警笛や三角表示板の備え、休息の必要性など再確認できよかった。ＮＨＫらしい地域密着型の情報はこれからも続けてほしい。

（ＮＨＫ側）

「ひるまえ」の気象情報に関しては、１１時５７分からきちんとした気象情報を伝えており、１１時３５分過ぎからの「チェック！そらもよう」では気象について詳しくなっていただくための知恵や情報を気象予報士の方が直接伝えるという趣旨でやっている。「Ｉ　ＬＯＶＥ　ＪＩＭＯＴＯ北海道」の演出方法については、新鮮な気持ちで伝えようという意図だが、気をつけたい。いただいた意見は今後の番組作りの参考にさせていただく。

○　５月９日(木)の「おはよう北海道」を見た。チャージ症候群という難病の少年の特集で、普通ならとても重苦しくなるような題材にも思えるが、朝にふさわしい前向きな仕立てになっていた。ただし、それだけでなく、少年の今後や両親の苦労についてなど、見終わった後でいろいろと考えさせられる、とても心に残る内容だった。

○　５月１１日(土)の「おはよう北海道土曜プラス」を見た。「ぶらりみてある記」のコーナーでは、浦幌の廃校になった学校でのカフェを紹介していた。“地域おこし協力隊”だった人がそのまま残ってカフェをやっていることをまちの新しい動きとして紹介しており、よかった。ただし、将来的な見通しはどうなのか、廃校になった学校でカフェが商売として成り立っていくのか気になった。

また、この日の最後のニュースで昨年の地震の被災地である厚真町の桜を取り上げており、とても印象的だった。がれきが積み上げられたままだったり、倒壊した家がそのままだったりと被災地の現状を伝えていた。その中でも、倒れた桜の木が花を満開に咲かせていたり、壊れた家の横で咲いている満開の桜を見ると、どんなにつらいことがあっても明日はやってくるのだ、ということを感じた。

○　５月１１日(土)のＷｉｌｄ　Ｈｏｋｋａｉｄｏ！「秋　屈斜路湖」を見た。シャーロット・ケイト・フォックスさんがカヌーに乗って屈斜路湖を紹介していた。湖のあちこちから温泉がわき出しているシーンで、「地球のパワーを感じる」というコメントがあり、屈斜路湖の魅力が十分伝わったのではないか。ただ、字幕が小さくて分かりづらく、特に屈斜路湖へのアクセス情報では、英語字幕の下のほうに日本語字幕があり、どっちを見たらいいのか気になった。

○　５月４日(土)、大樹町の民間ロケット打ち上げ成功のニュースを見た。延期に次ぐ延期で取材は大変だったと思う。発射からあまり時間がたっていない中、全国ニュースのトップ項目で伝えていた。インターネットでの生中継も見ていたが、テレビのニュース映像はきれいで迫力も伝わりよかった。

○　４月３０日(火)のＮＨＫスペシャル「日本人と天皇」(総合 後 8:00～8:54)を見た。天皇のあり方や制度について理解を深めるうえで、初めて公開された資料も使い、その時代に応じて天皇が姿を変えてきたということを分かりやすく伝えていた。新しい憲法になった後の象徴天皇制の中で、終戦直後どういう問題が出てきているのか。女系天皇の皇室典範の問題も踏まえて分かりやすく整理されていて、今後の天皇制や憲法との兼ね合いの問題を理解するうえで、非常にいい番組だった。

○　ＮＨＫスペシャル「日本人と天皇」を見た。とてもよくできた内容だった。ＮＨＫスペシャルで天皇と神の関わりや日本会議といった内容が取り上げられていて、驚いた。このままいくと皇室が自然消滅するのではないかという点についても、きちんとした形で取り上げていてよかった。

○　平成から令和に変わるタイミングであり、天皇陛下・皇后陛下についての特集番組が多かった。どれも見応えがあり、なおかつ感銘を受ける内容だった。いろいろなニュースが報道されている中で、デモなどの動きについてはニュースでは全く触れられておらず、気になった。

○　５月１日(水)の地球タクシー「函館を走る」(ＢＳ１ 後 10:00～10:49)を見た。今

回登場した運転手のみなさんは人柄もいいし、函館のこともよく知っているし、まちに対する愛情もある。人選がすばらしかった。函館は観光都市でもあるので、これまでも観光番組や情報番組で発信してもらっているが、その中でもこの番組はとてもよかった。

○　４月２１日(日)のダーウィンが来た!「知床に大集結！海の王者シャチ」を見た。知床のシャチはいろいろな番組で何度も取り上げているが、今回は３０分というコンパクトな時間の中でリズミカルにうまく編集されており、何度見てもよいと思った。

○　５月５日(土)のさわやか自然百景「春 北海道 函館の海」を見た。函館ではゴッコと言うのが一般的なホテイウオを撮影していた。あまり知られていない生態についても知ることができ、よかった。

○　５月９日(木)のあさイチ「ＪＡＰＡ－ＮＡＶＩ　北海道　十勝」を見た。「なつぞら」で照男役の清原翔さんと「北海道クローズアップ」にも出演していた松岡忠幸アナウンサーが十勝を取材して紹介しており、楽しく見ることができた。スタジオでもとても熱く十勝を紹介していて、画面を通して北海道愛を感じた。

○　「なつぞら」公式サイトで地元・十勝の方がコラムを書いているが、ＮＨＫの公式サイトで外部の方にコラムを書いてもらうというのは、すばらしいチャレンジだと思う。いままでサイトを見ていなかった地元の人たちも見るきっかけになる。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

２０１９年４月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

４月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、１７日(水)、ＮＨＫ札幌放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、北海道クローズアップ「夢をあきらめるな～日本製紙クレインズ最後の戦い～」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

続いて、５月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告があり、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	丸藤　競	（函館市地域交流まちづくりセンター　センター長）
副委員長	井田芙美子	（(株)いただきますカンパニー　代表取締役）
委　　員	嘉指　博行	（北海道新聞社論説委員）
	桐生　宇優	（北雄ラッキー株式会社　代表取締役社長）
	齋藤　拓也	（北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　准教授）
	佐々木良榮	（デザイナー、（有）良栄・ＰＬＡＮ　代表取締役）
	成田　正夫	（ながぬま農業協同組合　代表理事組合長）
	蛭田　亜紗子	（小説家）
	村田　博	（(株)村田商店　代表取締役）
	山下　徹也	（(株)グローバル経営センター　代表取締役専務）

（主な発言）

＜北海道クローズアップ「夢をあきらめるな～日本製紙クレインズ最後の戦い～」（総合　４月１３日(金)）について＞

○　番組内で「釧路からなくしてはならない」と繰り返し言われていたが、この言葉に非常に違和感を持った。実業団チームは企業の業績次第でチームが消滅することは簡単に起きることなので、それを美談としてではなく、もしかしたら他のまちでも同じようなことが起きるかもしれないということを「北海道クローズアップ」としては伝えてほしかった。また、財政面でどれだけ苦しいかを取材の中で取り上げるのは難しいとは思うが、集客面などの数字を分析すると、本当に地域に根付いているかどうかは分かるのではないか。署名活動自体も受け取ったあとに、それがこれから先にどういう意味を示すのかが分からなかった。わたしはよく「取材対象に寄り添って番組を作ってください」と言っているが、今回はクレインズの廃部をあまりにも美化し過ぎている感じを受けた。この内容に関しては、もっと距離を置いた番組の作り方であってもよかったのではないか。

○　単なるクラブチームではなく、釧路というまちとともにあるクレインズの姿を強く真摯（しんし）にとらえた番組で、とても胸に迫るものがあった。ただ、ファンの思い入れがとてもよく伝わってきた一方で、アイスホッケーの競技としてのおもしろさや魅力は伝わりにくかった。競技としての盛り上がりが、ひいてはチームの存続にもつながっていくのではないかと思うので、もう少し掘り下げて知りたかった。

○　釧路の産業が衰退していく中、経営難で廃部にしなければならないという事情はよく分かった。ただ、チーム自体が地域経済にどういう価値をもたらしていたのか見えず、廃部が決まり惜しむファンが１０万人の署名を集めたということしか伝わらなかった。選手たちの地域活動は紹介されていたが、経済的な側面などは番組からは伝わりづらかった。また、夜中に大人が水まきをしてスケートリンクを作るシーンがあったが、そういう伝統や環境が子どもたちへとつながっていくというところをもっと見せてくれたら、よかったのではないかと思う。

○　氷都の釧路ではアイスホッケーが一つの風土になっていると伝わってきた。市民や選手の「今まで積み上げてきたものが崩れていくような思い」「地元の希望がなくなる」といった言葉からは、まち自体の危機感を感じた。また、番組後半は選手に焦点を当てて、一度引退を決めたベテランの選手も「新しいユニフォームを着たい」という思いに変わり、「すべての人がチームだった」というとても印象的な言葉につながる展開になっていてよかった。「夢をあきらめるな」というタイトルの意味が伝わる番組だった。

○　最後の試合となった日と番組放送日までの時間差があったため、ニュースなどでチームの引受先も見つからなくて苦戦している状況が伝わってきており、この番組の最後で「必ず道は開ける」と言われても、つらさが感じられた。今後の展開に向けてどう動いていくのかを付け加えてもらいたかったと思う。また、「チームを持つ会社の責任」と「アイスホッケーという競技に未来があるのかどうか」という点についても触れてほしかった。どうしたら競技として残っていけるのかといった視点もあれば、子どもたちにもアイスホッケーの魅力を伝えていくことにもなると思う。

○　多くの内容を２５分という短い時間の中に分かりやすく入れ込んでおり、とてもよくできた番組だったと思う。廃部が決定したクレインズが、プレーオフ・ファイナルまで勝ち残ったというとてもドラマチックな結末で、感動した。しかし、まちとクレインズがあまりにも一体として描かれており、釧路市以外の人たちが見た場合、ふに落ちないところがあるのではないかと思った。

○　ストーリーとしては本当にドラマチックで、見ていておもしろかった。ただし、アイスホッケーに興味のない人にも見てもらうためにも、「氷上の格闘技」というアイスホッケーのぶつかりあう激しい映像などもあれば、視聴者の心もつかみ、よりみんなが応援したくなるイメージになったのではないかと感じた。また、自治体とスポンサー企業のかかわり方については、もう少し深く掘り下げてほしかった。

○　釧路のまちでアイスホッケーがどれほど愛されていて、それに実業団のチームがどれほど深くかかわっているのかを理解することができた。チーム廃部という深刻さは重大だと思ったが、ファンとチームの人たちとの視点で番組ができていて、周囲からそれを見ている人はいないのだろうかというのが気になった。例えば署名を１０万筆集める大変さはどれほどで、集めた署名がどういう扱いを受けるのかといったように、客観的にどういう状況にあるかが分からないところがあり、見ていてもどかしく感じた。しかし、全体の作りはテンポもよかったので、クレインズに限らず地域のスポーツシーンについて地方の放送局が発信する番組がもっと見たいと思った。

○　最後の戦いの 100 日に密着して、寄り添って取材していくということに関しては、非常におもしろい、興味深い内容だった。ただ、廃部は夢をあきらめたことになるのか、存続ならばなぜこういう事態になってしまったのかを追うべきだったのではないか、この「夢をあきらめない」というタイトルが見る側を混乱させてしまった気もする。好意的に見ていたが、署名を集めてだれに出すのかが分からなかったし、クラブチームを新しく作って存続させようという動きが全く出てこなかったことなど、疑問に思うこともあった。短い放送時間の中でどういう方向でまとめるかというのは難しかったとは思うが、題材としてはとてもよかったと思う。

○　釧路のまちとのつながりがすごく深いと思ったが、まちというよりは、熱狂的なファンとのつながりがすごく強い競技なのだと思った。ただ、アイスホッケーの基本情報がほとんど分からなかったので、例えばリーグの仕組みがどうなっているのか、他のチームの運営のしかた、他のプロスポーツとの違いなど、そのあたりの説明もあるとよかった。釧路の人たちだけではなく、全道規模で応援していかなければいけないという流れを作るためにも、これからも報道していってほしい。

（ＮＨＫ側）

番組は、廃部という事態を受けて、選手とまちが最後までいかに戦ったかという過程を追った。幸いにもクレインズがプレーオフで善戦し勝ち進んで行ったので、そこに関わる方々に焦点を当てていく作りになった。行政や自

治体の動きが見えず、未来図がなかなか見えてこないなかでの制作だったため、署名活動の意味なども含め、今後も取材を継続して、番組あるいはニュースのリポート等でもフォローして伝えていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　４月５日(金)北海道クローズアップ「ファイターズ×コンサドーレ～二人の名将・勝利と育成の極意～」を見た。野村優夫キャスターを新たに迎えて、今シーズン期待される両チームの監督の人柄や価値観などがよく理解できて、好感の持てるインタビューだった。新年度に新キャスターを迎えて、明るい話題でスタートしていてよかったと思う。

○　最初は正直、あまり頭に入ってこず、２回目にしてようやく中身が分かった。２人の監督を対比しているようであまり対比になっておらず、別々の取材映像をただつなげた印象があったせいかと思う。例えば同じ質問、同じテーマに対するそれぞれの答えの違いなど、コントラストがもっとはっきりする作りのほうがおもしろくなったのではないか。ただ、２人のお話自体はとても興味深く、とても印象深かったので、中途半端に対比するよりは、どちらかをもっと掘り下げたほうがおもしろくなったのではないかと思う。

○　２人の監督の人柄や手腕がわかりやすく伝わって、スポーツファンだけではなく、企業人やそのトップにも役立つような教育や育成方法を示唆していたと思った。ただ、２人を対比する意味があったのだろうかとは感じた。栗山英樹監督の言葉などは、別々にもっとゆっくり見たいと感じた。番組中のナレーションがすごくさわやかで、分かりやすく聞きやすい声で好感が持てた。

（ＮＨＫ側）

２人の監督のスケジュールが合わず当初想定していた同時でのインタビューが困難になり、別個にインタビューを行った。しかし、競技に関しての考え方が違うため、うまくかみ合わなかったように思う。ねらいについては、スポーツに関心のない視聴者にもどうやって見てもらうかというところを最大限に考えた。

○　コンサドーレをどうしてあんなに強くすることができたのか知りたいと思い、番組を見た。栗山監督が教育者、ミハイロ・ペトロヴィッチ監督が父親のような感じで、２人の魅力をとてもよく引き出されていた。新しいキャスターの相手に食い込んでい

こうとする姿勢がとても印象的で、本音を聞き出そうとしている感じがとても出ていた。ペトロヴィッチ監督が最後に「アリガトウ」と言って番組スタッフに握手して回っているシーンがあったが、そのシーンでこの監督のことがよくわかった。ナレーションもとてもはきはきした感じで、地元のプロスポーツチームの活躍を期待したいというのが、とてもよく出ていたような気がした。

○　プロスポーツは結果がすべてであり、両チームとも低迷していた時期の放送だったので、番組の意図とは別に、２人の監督の言葉が、その時点では若干浮いて感じられた。しかし、２人の育成の技術と極意が今後１年間で生かされればと思う。

○　育成という面では、経営者が求めるビジネス番組としても見ることができ、とてもよかったと思う。

○　ペトロヴィッチ監督がスタッフみんなに握手をしているシーンが印象的だった。シーズン序盤での放送で、タイミングもよかった。

○　４月５日(金)「北海道知事選　与野党全面対決　投票日迫る選挙特番～知事選挙と札幌市長選挙の構図～」(総合 後7:55～8:25 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。知事選などの争点を明確に整理していて、分かりやすく伝えていることにとても好感を抱いた。ただ、スタジオにいるのが男性２人で、取り上げた道知事選、札幌市長選、下川町長選の各候補者も全員男性である一方で、一般市民の声として街角でインタビューされていたのは女性ばかりだったことが、とても引っかかった。育児や福祉というのは性別を問わない問題である。しかし、生活を担うのが女性で政治は男性といったジェンダーバイアスのようなものが番組全体にかかっているのではないか、という印象を受けた。意図的ではないと分かっているからこそ、無意識にそうなってしまうのは避けるべきであり、何らかのバイアスがかからないように常に意識してほしい。道知事選の２人の候補者を取り上げたときも、「候補者を支える奥さん」という形で奥さんも取り上げていたが、「支える奥さん」という取り上げ方はどうなのだろうかと気になった。

○　選挙特番の街頭インタビューについて、いわゆるジェンダーバイアスがかかっているのではないかという指摘を頂いたが、非常に参考になるご意見で今後きちんと考えていきたい。知事選の「候補を支える奥さん」というのは、候補の人となり、横顔を伝えようという意図で、家庭・家族のシーンとして描いた。

○　ジェンダーバイアスの件は、ＮＨＫだからこそ、そういったことに配慮した意識を持っていただきたいと思う。

○　４月６日(日)「２０１９統一地方選開票速報　北海道」(総合 後 7:59～9:45、後10:15～11:00、11:50～翌前0:00、前0:40～1:00 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。開票直後に知事選の当確が出て、出口調査のすごさを感じた。道議会議員選の結果は遅い時間になっていたが、それもしっかりと伝えてくれていた。

○　統一地方選挙の開票速報も、それ以前の「ほっとニュース北海道」でも道知事の各候補や選挙の情報がしっかり放送され、道内の各地域の動向を丁寧に伝えて、どの地域でどういう結果だったのかを非常に細かく伝えていた。取材や情報収集が生きていると感じた。今回の選挙報道では、ＳＮＳやメールなどで視聴者からの意見や質問を募っており、選挙への関心を高める効果があったと思う。しかし、開票速報に視聴者の声を使うのなら、もうちょっと踏み込んだ質問をするなど、はぐらかされないように質問してほしいとも感じた。知事としての「次の一手」をちゃんと聞いてほしい、と見ていて感じた。視聴者の意見をぶつけるというのであれば、記者やアナウンサーの取材方法にも工夫がほしかった。

○　選挙関係はニュースでも丁寧に取り上げられ、ツイッターやホームページなど、テレビ以外の媒体でも丁寧に発信されていたので、非常に参考になった。知事選の開票速報では、早々に当確が出たが、その後も地域別にどちらの候補が優位だったかということも詳しく伝えていた。

○　開票速報では各地域の細かな分析は確かにされていたが、知事選ばかりがずっと流れていて、道議選のニュースがなかなか流れてこなかった。それぞれの地域により根ざした道議の状況がどうなっているのかを知りたい。道議選の出口調査をやっていたのであれば、その情報なども伝えていれば、最後までもう少し興味を持って見てもらえたと思う。開票数は細かい数字でも知らせるなどの対応をして、選挙離れにならないようにしてもらいたい。例えば、出口調査はどのように行っているのか、どうして出口調査が必要なのか、などの情報がもう少しあればいいと思う。また、いきなり「当確」を出すことで「自分が選挙に行って投票することはむだ」と思われないような工夫をしてほしい。今回の知事選、道議選はともに投票率が低くて、このままいくと立候補する人がいない、投票する人もいない、何のための選挙かとなりかねないので、そういったことをもっと取り上げていただきたいと思う。

○　連続テレビ小説「なつぞら」を見ている。草刈正雄さんのセリフには重みがあり、わたしたちの人生にも大きく影響するような言葉も出てくる。非常にいい番組で、こ

れからも主人公の成長が楽しみだ。

○　冒頭のアニメーションの完成度の高さに驚いた。随所にアニメへのオマージュを入れたりしており、ＳＮＳで話題になることを意識していると思う。

○　今回は、ヒロインがアニメの世界に入っていく物語なので、冒頭からアニメを意識している。戦争のシーンをアニメで描くことによって逆に想像が膨らみ、うまく表現できていると思う。

○　草刈さんの演技、主人公の子ども時代を演じた粟野咲莉さんの演技に引き込まれた。この番組を通して十勝のイメージ、北海道のイメージを持つ人は多いと思うのでこれからの展開に期待したい。

○　事実に基づいて、よく取材した中で丁寧に作られていると感じた。また、十勝は大いに盛り上がっているが、北海道全体としての盛り上がりが客観的にどうなのか。「十勝の話」と見られているのか、全体として盛り上がって興味をもたれているのか、わかる範囲で教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

前回の「まんぷく」に比べると、札幌でも確実に関心が高い。北海道をアピールできる絶好の機会なので、引き続き番組ＰＲも強化していきたい。

○　４月７日(日)のさわやか自然百景「北海道大学　冬」を見た。自然の風景だが、人間が生きている環境と自然がどういうかかわりや接点を持っているのかが描かれていて、うまく作られていると思った。自分の知らない世界が広がっているのを思い知らされて、こういう映像を撮って番組にする人たちの着眼点は全然違うのだと、驚きながら見た。撮影場所に自分でも見に行ってみたいと思うような番組であった。

○　４月１０日(水)の「ガイロク（街録）」を見た。500 人以上インタビューした中から５組のエピソードを紹介する新番組で、街を普通に歩いている人の中にも人生の山あり谷ありがあり、それを乗り越える話を紹介しており最後まで見てしまった。夜遅くに放送されている番組だが、これまであまりなかった番組づくりに挑戦する姿勢を評価したい。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局